

NETWORK

NIRA 助成研究報告①「高齢者はなぜふるさとを離れたのか」…… 2
 量から質へ、さらにまちづくりへの取り組み…………… 7
 - 田川市炭鉱住宅改良のあゆみ -
 新しい時代の助け合いのかたちを考える…………… 9
 若者の住み続け意識=郷土のシンボル特化度×住み良さ評価 …… 11
 地域データ散歩①若者定着の様子…………… 12
 地域計画のための一知半解事典②
 地域資源さがし、資料マップづくり…………… 14

見・聞・食

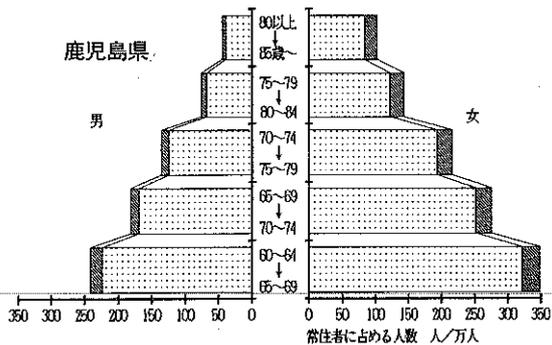
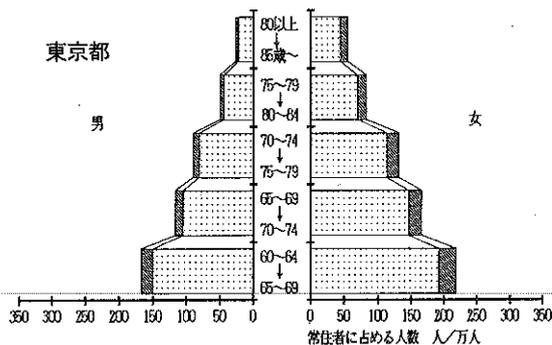
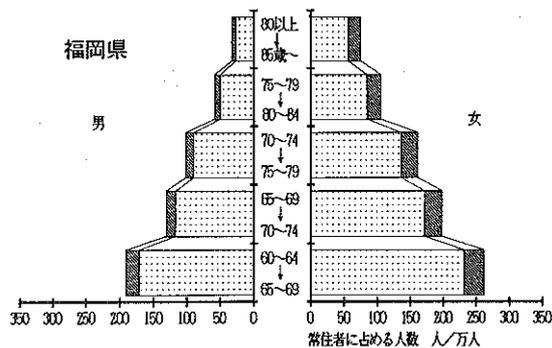
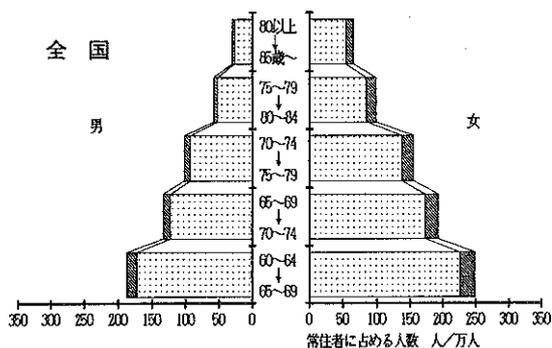
住民の手で守り、活用している民家
 - 津屋崎千軒民俗館「藍の家」-…………… 15
 白壁土蔵は起きている-福岡県吉井町-…………… 16
 佐伯市の観光拠点は駅前の寿司屋…………… 18

近況

私の近況/新人紹介…………… 18

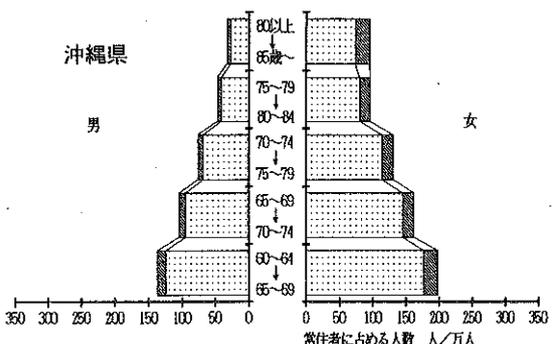
本・BOOKS

「街道をゆく40 台湾紀行」司馬遼太郎…………… 22



●高齢者及び移動者(5年間)の比率 (1万人当たり)

- 鹿児島県は高齢者が多い。沖縄県の2倍近い。
- 沖縄県の男女差が高齢になるほど大きくなっているのは、戦争(戦死等)の影響とみられる。
- また沖縄は若い人が多く、出生率も高いので、相対的に高齢者が少なくなっている。
- 移動者(5年前に現住所以外のところに住んでいた人で、途中の動きは含まれていない=国勢調査)は女性が多く、福岡、鹿児島、沖縄はいずれも同じくらいの方が転入・転出をしている。特に、沖縄の85歳以上の女性が多いのが目につく(数表は本文23頁参照)。



□ 5年前、現住所にいた人 ■ 5年前、他県にいた人

NIRA 平成7年度助成研究報告①

「高齢者はなぜふるさを離れたのか」

—— 高齢者の自立した生活が、明るい高齢社会をつくる ——

これまで、わが国の人口移動というと、若年層の就学・就業による大都市への大きな流れが、地方の活力低下の原因として問題とされてきたが、平成2年国勢調査をみると、若年層の移動と同じように、高齢者についても人口移動（平成2年国勢調査において「5年前に現住所以外のところに住んでいた人」が人口移動と定義されている）が意外に多くみられることに気がついた。これについて、平成7年度NIRA（総合研究開発機構）の助成を受け、研究を行ったので報告を行いたい。

わが国で、全5歳階層ごとに昭和60年～平成2年の5年間の人口移動率（県内移動と府県間移動）を整理すると、若年層では大きな移動率になっているが、年齢が上がっていくほど徐々に安定化していく傾向がうかがえる。しかし、この傾向は60歳代までがピークで、それから上の年齢層では加齢とともに移動率が上がっている。

●九州・山口の高齢者の気になる動き～農村部から都市へ、大都市圏への流出

九州・山口各県の高齢者の人口移動（府県間移動）をみると、3つの移動パターンに分けられる。

- ① 65歳以上の全階層で、一貫して転入超過になっている（福岡県、沖縄県）

九州・山口からの高齢者の転出先

単位：人

| | 第1位 | 第2位 | 第3位 |
|------|----------|----------|---------|
| 山口県 | 608 関東 | 561 近畿 | 539 福岡 |
| 福岡県 | 1,964 関東 | 1,305 近畿 | 856 佐賀 |
| 佐賀県 | 1,130 福岡 | 306 関東 | 250 近畿 |
| 長崎県 | 1,185 福岡 | 624 関東 | 568 近畿 |
| 熊本県 | 1,100 福岡 | 652 関東 | 547 近畿 |
| 大分県 | 1,080 福岡 | 485 関東 | 411 近畿 |
| 宮崎県 | 392 関東 | 358 近畿 | 295 鹿児島 |
| 鹿児島県 | 1,265 近畿 | 1,070 関東 | 451 福岡 |
| 沖縄県 | 229 関東 | 134 近畿 | 53 鹿児島 |

資料：「国勢調査」（平成2年）
注：関東（東京、埼玉、千葉、神奈川）
近畿（京都、大阪、奈良、兵庫）

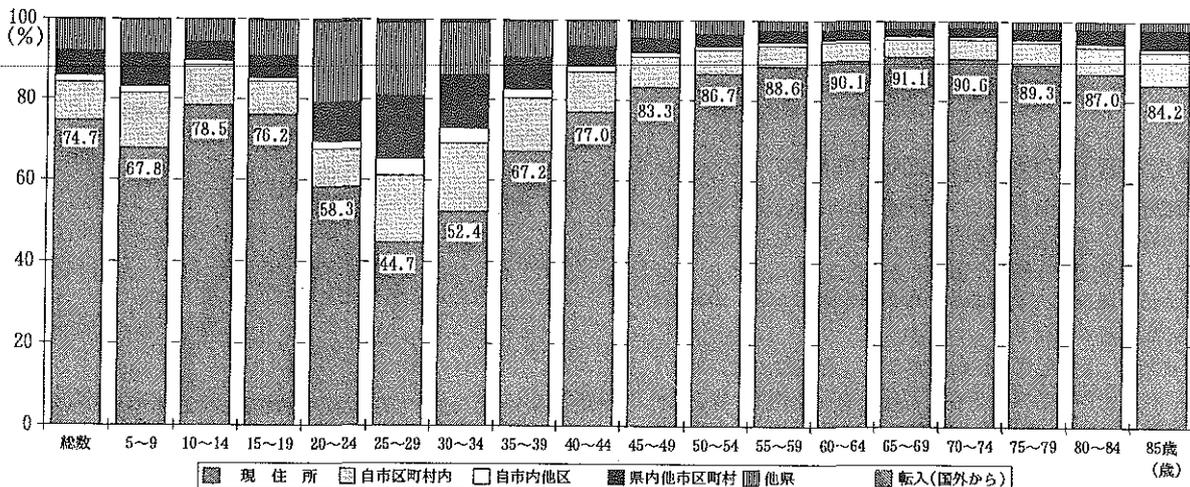
- ② 65歳以上の全階層で、一貫して転出超過になっている（佐賀県、長崎県）

- ③ 高齢前期の定年退職期には転入超過が多いが、それ以降は転出が多くなっている（山口県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県）

さらに、九州・山口の高齢者の県ごとの転出先を集計してみると、3大都市圏への転出が多くなっていることが分かった。

各県の人口移動は市町村移動の集計値であるが、市町村レベルの人口移動では、県内での人口移動、府県間の人口移動の2重構造で把握される。

わが国の5歳階層別における人口の転出・転入の状況（数字は移動しなかった人の割合）



九州・山口の高齢者移動状況

単位：人、%

| | 転出 | | 転入 | | |
|-----|---------------|-------|--------|-------|------|
| | 数 | 率 | 数 | 率 | |
| 山口県 | 60～64歳→65～69歳 | 957 | 0.9% | 986 | 1.0% |
| | 65～69歳→70～74歳 | 726 | 0.9% | 753 | 0.9% |
| | 70～74歳→75～79歳 | 670 | 1.1% | 545 | 0.9% |
| | 高齢前期 小計 | 2,353 | | 2,284 | |
| | 75～79歳→80～84歳 | 531 | 1.0% | 454 | 0.9% |
| | 80～84歳→85歳～ | 340 | 1.1% | 312 | 1.0% |
| | 高齢後期 小計 | 871 | | 766 | |
| 合計 | 3,224 | | 3,050 | | |
| 福岡県 | 60～64歳→65～69歳 | 2,849 | 1.1% | 3,190 | 1.2% |
| | 65～69歳→70～74歳 | 2,226 | 1.1% | 2,298 | 1.1% |
| | 70～74歳→75～79歳 | 1,924 | 1.3% | 2,093 | 1.4% |
| | 高齢前期 小計 | 6,999 | | 7,581 | |
| | 75～79歳→80～84歳 | 1,335 | 1.1% | 1,517 | 1.3% |
| | 80～84歳→85歳～ | 910 | 1.2% | 1,010 | 1.4% |
| | 高齢後期 小計 | 2,245 | | 2,527 | |
| 合計 | 9,244 | | 10,108 | | |
| 佐賀県 | 60～64歳→65～69歳 | 623 | 1.1% | 610 | 1.1% |
| | 65～69歳→70～74歳 | 555 | 1.3% | 422 | 1.0% |
| | 70～74歳→75～79歳 | 509 | 1.5% | 390 | 1.2% |
| | 高齢前期 小計 | 1,687 | | 1,422 | |
| | 75～79歳→80～84歳 | 394 | 1.5% | 320 | 1.2% |
| | 80～84歳→85歳～ | 301 | 1.7% | 262 | 1.5% |
| | 高齢後期 小計 | 695 | | 582 | |
| 合計 | 2,382 | | 2,004 | | |
| 長崎県 | 60～64歳→65～69歳 | 1,132 | 1.2% | 1,001 | 1.0% |
| | 65～69歳→70～74歳 | 936 | 1.2% | 645 | 0.8% |
| | 70～74歳→75～79歳 | 848 | 1.5% | 460 | 0.8% |
| | 高齢前期 小計 | 2,916 | | 2,106 | |
| | 75～79歳→80～84歳 | 569 | 1.3% | 315 | 0.7% |
| | 80～84歳→85歳～ | 358 | 1.2% | 208 | 0.7% |
| | 高齢後期 小計 | 927 | | 523 | |
| 合計 | 3,843 | | 2,629 | | |
| 熊本県 | 60～64歳→65～69歳 | 1,021 | 0.9% | 1,229 | 1.0% |
| | 65～69歳→70～74歳 | 871 | 0.9% | 831 | 0.9% |
| | 70～74歳→75～79歳 | 867 | 1.2% | 649 | 0.9% |
| | 高齢前期 小計 | 2,759 | | 2,709 | |
| | 75～79歳→80～84歳 | 563 | 1.0% | 419 | 0.8% |
| | 80～84歳→85歳～ | 327 | 0.9% | 326 | 0.9% |
| | 高齢後期 小計 | 890 | | 745 | |
| 合計 | 3,649 | | 3,454 | | |

九州・山口には、2つの100万都市、9つの県庁所在市、かつて産炭地として賑わった都市、重工業都市、ベッドタウン都市、過疎化した都市などいろんなタイプの都市があり、それぞれの都市について人口移動の状況が違っている。

それでも、市町村レベルの集計である県レベルでみた大都市圏への高齢者の転出移動や、市町村レベルで見られる農村部の転出超過し都市部の転入超過をふまえると、農村から都市へ、九州・山口から大都市圏へ、という高齢者の人口移動の実態が伺えた（若い人だけでなく高齢者も都市に吸引されている）。

| | 転出 | | 転入 | | |
|------|---------------|-------|-------|-------|------|
| | 数 | 率 | 数 | 率 | |
| 大分県 | 60～64歳→65～69歳 | 759 | 0.9% | 920 | 1.1% |
| | 65～69歳→70～74歳 | 666 | 1.0% | 580 | 0.9% |
| | 70～74歳→75～79歳 | 676 | 1.4% | 445 | 0.9% |
| | 高齢前期 小計 | 2,101 | | 1,945 | |
| | 75～79歳→80～84歳 | 520 | 1.3% | 302 | 0.8% |
| | 80～84歳→85歳～ | 349 | 1.4% | 186 | 0.8% |
| | 高齢後期 小計 | 869 | | 488 | |
| 合計 | 2,970 | | 2,433 | | |
| 宮崎県 | 60～64歳→65～69歳 | 583 | 0.8% | 814 | 1.1% |
| | 65～69歳→70～74歳 | 521 | 0.9% | 477 | 0.8% |
| | 70～74歳→75～79歳 | 426 | 1.0% | 370 | 0.9% |
| | 高齢前期 小計 | 1,530 | | 1,661 | |
| | 75～79歳→80～84歳 | 303 | 0.9% | 228 | 0.7% |
| | 80～84歳→85歳～ | 173 | 0.8% | 122 | 0.6% |
| | 高齢後期 小計 | 476 | | 350 | |
| 合計 | 2,006 | | 2,011 | | |
| 鹿児島県 | 60～64歳→65～69歳 | 1,147 | 0.9% | 1,464 | 1.2% |
| | 65～69歳→70～74歳 | 940 | 0.9% | 854 | 0.9% |
| | 70～74歳→75～79歳 | 1,042 | 1.3% | 473 | 0.6% |
| | 高齢前期 小計 | 3,129 | | 2,791 | |
| | 75～79歳→80～84歳 | 858 | 1.4% | 285 | 0.5% |
| | 80～84歳→85歳～ | 516 | 1.4% | 205 | 0.6% |
| | 高齢後期 小計 | 1,374 | | 490 | |
| 合計 | 4,503 | | 3,281 | | |
| 沖縄県 | 60～64歳→65～69歳 | 233 | 0.5% | 273 | 0.5% |
| | 65～69歳→70～74歳 | 156 | 0.4% | 195 | 0.5% |
| | 70～74歳→75～79歳 | 90 | 0.3% | 157 | 0.5% |
| | 高齢前期 小計 | 479 | | 625 | |
| | 75～79歳→80～84歳 | 74 | 0.3% | 85 | 0.4% |
| | 80～84歳→85歳～ | 42 | 0.3% | 64 | 0.4% |
| | 高齢後期 小計 | 116 | | 149 | |
| 合計 | 595 | | 774 | | |

※) 転出・転入の率は各階層で移動した高齢者の各県における同一常住者の総数に対する比率である

しかし、実際に移動をしている高齢者の立場にとってみれば、長年、住み慣れたところを離れて見知らぬところに行くのは、気持ちの面や健康にいろんな影響を及ぼすのではないかと思われた。

●生活の安定にかげりがみえたとき、高齢者がふるさとを離れるきっかけに

高齢者の人口移動に関して、九州・山口地区のいくつかの市町村で、行政の高齢福祉担当者や地元に残っている高齢者などに話を聞いてみて、田舎の高齢者が都会の子供に引き取られていくことで、どういう問題が実際に起こっているのかを調べてみた。

その結果、高齢者が都会の子供に引き取られて（同居や施設入所）いくと、

「田舎では元気だったのが健康を損ねて病弱になった」

「都会の生活に慣れず、精神を病んでしまった」

「わずらっていた痴呆症が進行してしまった」

「引き取られて早々に亡くなった」

などの話が多く聞かれた。また、一度、都会の子供のところに行っても都会の生活になじめずに、一人で農村に戻ってくる話も多く聞かれた。

都会の子供に引き取られるきっかけは、

①夫婦のどちらかが亡くなった時

②病気や虚弱や痴呆などで要介護になったとき

③住んでいた住宅が住めなくなったとき

など生活の安定にかけりが生じたとき、子供が心配して親を呼んだりすることだという。

●田舎の高齢者は、都会への移動で生活環境の激変に直面する

田舎の高齢者にとって、長年住み慣れた故郷を離れて都会に行くことは、生活環境の激変に直面することである。都会の暮らしでは、田舎のように外も自由に散歩できない（車が多いので）、生きがいを感じる労働や役割を担う場も見つけにくい（農作業など行う場所が都会にない）、近所に知り合いもいない、都会の人と言葉が通じない、などからどうしても家に引きこもって過ごすことになるため、高齢者の身体が弱りやすくなる。

親は農村での暮らしに慣れている一方で、子供はすっかり都会の人になっているため、子供が都市部に親を呼び寄せて同居をすすめても、生きがいや生活スタイルなどの接点が少なくなっているのだろう。

親子の居住の安定を同居という形で解決しようと試みて、良かれと思って都会に親を呼び寄せても、双方にとって、決して安心できる居住につながっていないことに問題がある。

●自分の役割がしっかりあって、尊敬されているところでは高齢者は移動が少なくて元気

一方、九州・山口のいろんな市町村の人口移動を整理していると、高齢者の県外移動の数が非常に少ないところがあることに気がついた。

例えば、佐賀県の七山村と長崎県の北有馬町の2つの農山町・村では、高齢者の県内他市町村への転出が多いのに対し（七山村33人、北有馬町61人）、県外への

北有馬町の高齢者移動状況

単位：人

| | 転出 | | 転入 | |
|--------------|----|----|----|----|
| | 他県 | 県内 | 他県 | 県内 |
| 60～64→65～69歳 | 0 | 5 | 3 | 1 |
| 65～69→70～74歳 | 1 | 13 | 0 | 3 |
| 70～74→75～79歳 | 1 | 12 | 0 | 1 |
| 高齢前期 小計 | 2 | 30 | 3 | 5 |
| 75～79→80～84歳 | 1 | 10 | 1 | 3 |
| 80歳～→85歳～ | 2 | 21 | 0 | 1 |
| 高齢後期 小計 | 3 | 31 | 1 | 4 |
| 合計 | 5 | 61 | 4 | 9 |

資料：「国勢調査」（平成2年）

長崎県の旧産炭都市における高齢者移動

単位：人

| | 転出 | | 転入 | |
|--------------|-----|----|----|----|
| | 他県 | 県内 | 他県 | 県内 |
| 60～64→65～69歳 | 36 | 20 | 15 | 13 |
| 65～69→70～74歳 | 32 | 12 | 9 | 5 |
| 70～74→75～79歳 | 27 | 17 | 9 | 8 |
| 高齢前期 小計 | 95 | 49 | 33 | 26 |
| 75～79→80～84歳 | 27 | 11 | 3 | 13 |
| 80歳～→85歳～ | 14 | 11 | 5 | 4 |
| 高齢後期 小計 | 41 | 22 | 8 | 17 |
| 合計 | 136 | 71 | 41 | 43 |

資料：「国勢調査」（平成2年）

転出は非常に少ない（七山村6人、北有馬町5人）。

長崎県内のある都市の場合と比較しても、人口規模などの差はあるものの、県外への転出が殆どない状況である。この人口移動の状況が目をはいたため、考えられる理由について、この2町村の役場の高齢福祉や企画の担当職員に話を聞いてみた。

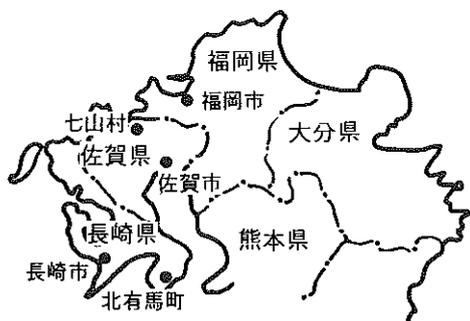
すると、双方の町村で「高齢者が現役で農業を続け、元気なのが人口移動の少なさの原因になっているのではないですか」といわれた。

七山村には、九州で最も模範とされている農産物販売場「鳴神ノ庄」があり、町内の多くの高齢者が個人で農産品を出荷し、現金収入を得ている。手作りコンニャクなどの味が良いため、高齢者の出荷する農産品はなかなか人気があって、都会から買いにくる客にも喜ばれ、つくっている人は村の中でも尊敬されている。

北有馬町では温暖な気候を生かした肉牛の飼育と蜜柑の栽培が盛んで、総就業者に占める第1次産業就業者比率は55%（平成2年時点）と基幹産業になっている。ここでも農業就業者のうち65歳以上の高齢者は、若い人に交じって高齢者も身体が動く範囲内で農業に精を出している。

この2町村では農業就業者のうち、後継者にあたる20～49歳の階層の就業者が全体の4～5割弱を占めており、後継者が比較的多くいるため、高齢者が農業の主力を担っているのではなく、無理のない範囲で農作業を通じて生活を楽しんでいる。

七山村と北有馬町の位置



農業は経験と実力がものをいう産業といわれるが、労働集約型の産業でもある。就農世帯において労働の最低単位は家族であり、後継者がいる農家では親も子も現役で、親と子の同居率が非常に高くなる。

七山村や北有馬町では、村人口や町人口に対する65歳以上の高齢者の同居世帯人員の比率が県平均の数倍になっている。この同居率の高さが高齢者の生活サポートという面も含めて、高齢者の人口移動の少なさに影響を与えているのではないかと考えられる。

高齢者が地域の農業に無理なく参加でき、それなりに精神的な自立も可能であるので（農産品を出荷したりして現金収入を得ている）、農業の労働形態に見合った同居という居住スタイルで地域に留まっている。

●親が子と離れてお互いに自立し合って過ごす村

また、沖縄県の北部にある大宜味村は、世界的に長寿率（人口あたりの90歳代、100歳代の人口比率）が高い地域として有名であるが、ここでは高齢者は子供がすぐに帰れる場所に住んでいるため（那覇市からでも車で3時間弱）、子供が親を都会に引き取らなくても、高齢者が近所づきあいをしながら畑作業などをして、無理なく自立した生活を過ごしている。長寿の村は同時

に若い人があまり残っていない村になっているが、何かあっても近所の高齢者同士でサポートし合って、それなりにうまくやっている。

現地で高齢者に話を聞いてみると、最初はやはり子供が心配して、親を大宜味村から那覇市あたりのマンションに呼んで同居させようとしたらしい。しかし、「都会の生活に飽きた」といって、すぐに戻ってくる人があとを絶たなかったそうである。戻ってきた高齢者は自分で住むのに最低限必要な居住スペースとして、14~15坪程度の小さな家を建てて住むケースが多いという。そして、農業や漁業などをしてのんびり生活している。

居住スペースも含めて、高齢者の自立した生活と地域社会全体の長寿に、非常に密接な関係があるように思えた。

●高齢者の自立を前提とした地域づくり

田舎から都市に高齢者を呼ぶ場合の問題をみてみると、子が親を呼び寄せるきっかけ（①独居になったとき、②介護が必要になったとき、③住宅が確保できないとき）が仮に生じた場合でも、高齢者が地域内で自立して生活を続けることができる地域づくりがあっても良いのではないかと思われた。

いろんな市町村の高齢福祉施策の担当者に話を聞いてみて、高齢者が一人になった場合や介護が必要になった場合、それでも自立した生活をサポートするという選択誌がはじめてから用意されていないのでは、と感じられる場面も多かった。

わが国の高齢者福祉施策の方向性は、新ゴールドプランの指針では、これまでの施設介護中心から在宅介護中心への移行となっているが、介護などの生活サポー

農業就業者の年齢別構成比

| 市町村名 | 単位：人、% | | | |
|-------------|-------------------|---------------|-----------------|---------------|
| | 長崎県 | 北有馬町 | 佐賀県 | 七山村 |
| 人口 | 1,562,959 (100.0) | 4,797 (100.0) | 877,851 (100.0) | 3,125 (100.0) |
| 総就業者数 | 706,441 (45.2) | 2,516 (52.4) | 426,775 (48.6) | 1,683 (53.9) |
| 農業就業者数 | 66,575 (4.3) | 1,397 (29.1) | 57,540 (6.6) | 899 (28.8) |
| 主として農業に従事 計 | 93,347 (6.0) | 1,696 (35.4) | 77,919 (8.9) | 1,071 (34.3) |
| 16~19歳 | 2,384 (0.2) | 54 (1.1) | 1,631 (0.2) | 19 (0.6) |
| 20~29歳 | 4,356 (0.3) | 149 (3.1) | 3,569 (0.4) | 96 (3.1) |
| 30~39歳 | 10,146 (0.6) | 278 (5.8) | 8,942 (1.0) | 213 (6.8) |
| 40~49歳 | 11,259 (0.7) | 235 (4.9) | 9,242 (1.1) | 179 (5.7) |
| 50~59歳 | 22,002 (1.4) | 420 (8.8) | 17,752 (2.0) | 240 (7.7) |
| 60~64歳 | 16,269 (1.0) | 258 (5.4) | 13,582 (1.5) | 145 (4.6) |
| 65~69歳 | 12,882 (0.8) | 160 (3.3) | 10,847 (1.2) | 93 (3.0) |
| 70歳以上 | 14,319 (0.9) | 142 (3.0) | 12,354 (1.4) | 86 (2.8) |

資料：国勢調査、農林業センサス

注1) 括弧内の数値は各項目の数値の総人口に対する比率を示す 注2) 「主として農業に従事」以下は農林業センサス

高齢者の居住世帯状況

単位：人、%

| | 佐賀県 | 七山村 | 長崎県 | 北有馬町 |
|-----------------------------|--------------------|------------------|----------------------|------------------|
| a)総人口 | 877,851 (100.0) | 3,125 (100.0) | 1,562,959 (100.0) | 4,797 (100.0) |
| b)65歳以上人口 | 132,972 (15.1) | 527 (16.9) | 228,991 (14.7) | 855 (17.8) |
| c)65歳以上 一般世帯人員 | 124,127 (14.1) | 526 (16.8) | 212,289 (13.6) | 854 (17.8) |
| d)高齢者夫婦世帯 65歳以上人員 | 25,530 (2.9) | 34 (1.1) | 60,715 (3.9) | 125 (2.6) |
| e)高齢単身者 | 11,845 (1.3) | 18 (0.6) | 32,215 (2.1) | 74 (1.5) |
| f)一般世帯別65歳以上人員 (f=c-d-e) | 86,752 (9.9) | 474 (15.2) | 119,359 (7.6) | 655 (13.7) |
| g)75歳以上人口 | 56,236 (6.4) | 247 (7.9) | 92,053 (5.9) | 361 (7.5) |
| h)1995年総人口 | 884,301 (0.7) | 2,869 (-8.2) | 1,545,045 (-1.1) | 4,580 (-4.5) |

注1) :不詳除く

注2) :a~g項の () 内はa項に対する比率
h項の () 内は対1990年増減率

注3) :各項目の意味を書くと、f)は一般世帯同居高齢者で、単身も夫婦もあると考えられる。一方d)とe)は、高齢者のみ(ほぼそう考えられる)の人数で、この比重が大きいのは高齢者の世帯が多いことを示す

資料：「国勢調査」

トを含めて、高齢者の自立した生活が今後の高齢社会で重要な課題になっていくのではないかと思われた。

●親と子が自立した関係を築く「様子見居住圏域」

親と子の自立した関係を持ったままで、お互いを気にかけてながら無理をせず生活できる居住圏域といった捉え方が出来るのではないかと思われた。

それは、子が親の居住地に比較的近いところに住んでいるか、気になるときは親の顔を見に行けて、普段は親の地域社会での自立した生活を尊重する、いわば様子見居住圏域というようなものではないか。「スープの冷めない距離」という言葉があるが、「普段は干渉しないで、気になったらすぐに行ける距離」というのは、同居とは少し異なる親子の居住の関係になるのではないかと考えられる。

この「様子見居住圏域」の維持によって、①親に何かあってもすぐに介護にかけつけることができる、②日頃サポートしている近隣の人達にしても親の子供が近くに居るので気分的に楽である、③様子見居住圏域ぐらいの居住であれば親子の定期的交流が可能、④車で2~3時間の距離なら親の住んでいるところの自然環境が良ければ、ちょっとした農村リゾートになり、地域活性化の方策にもなる、などの利点を生み出していくものと思われる。

●個人の自立と地域社会の自立へ

この居住圏域の捉え方は、親子の行き来や住宅の構え方などでみれば個人レベルのものとも捉えられるが、「様子見居住圏域」をなり立たせるには、子供が近くで

生活できるような地域産業施策、住宅施策、ネットワーク基盤施策などの取り組みが必要となり、地域づくりの取り組みと捉えることもできる。

居住空間では地方に住む高齢者の既存の住宅の手入れや地域にある空いた旧家の活用なども考えられる。また、現在2~3世代住宅や100年住宅などの親子の同居を前提とした住宅は市場流通しているが、これとは反対に、高齢者が一人になって地域に残って生活することになっても、メンテナンスや居住スペースの利用上無駄がない、小さな家の空間やモジュールについての研究なども取り組まれて良いように思える。

また、様子見居住圏域の成立には、圏域を形成するための地域社会の自立が必要になる。全国一区の雇用システムが近年崩れつつある今、都会であっても田舎であっても、土地や立地条件に結び付いたサービスや商品を製造し、人を呼んで消費させたりすることは、地域に密着した地場産業として成長させることができる。過疎地では様子見圏域という農村と都市の交流を狙って、定住希望者の受け入れを促進する方策も考えられる。

今回挙げた七山村、北有馬町、大宜味村はいずれも人口の減少が続いている社会ではあったが、地域に住む高齢者がそれなりに自立して、明るく住んでいる様子を見ると、高齢社会に向けた危惧ばかりが伝えられる中、少しは明るい材料になるのではないかと思った。

(尾崎 正利)

量から質へ、さらにまちづくりへの取り組み

— 田川市炭鉱住宅改良のあゆみ —

「香春岳は異様な山である。決して高い山ではないが、そのあたえる印象が異様なのだ」

これは田川・飯塚を舞台とした五木寛之著「青春の門—筑豊編」の書き出しの一節である。この香春岳は、主人公の伊吹信介が父を亡くし、母親のタエと一緒に飯塚に移るまで、炭鉱住宅からいつも眺めていた風景であったと思う。

田川市のシンボルとしてそびていた香春岳の一ノ岳は、セメントの材料となる石灰石の山であったため、今は3合目あたりまで削り取られて、その名山の面影は留めていない。また、炭鉱も昭和30年代初頭から進められてきたエネルギー革命によって、筑豊地域の炭鉱は昭和40年代には全て閉山し、跡にはボタ山や廃坑、それと膨大な炭鉱住宅が残された。

福岡県の炭鉱住宅の改良住宅の建設は、昭和43年に穂波町の30戸を皮切りに各地で実施され、田川市では昭和48年の中央団地から取り組まれている。炭住改良の事業手法としては、炭住戸数が50戸以上の地区であれば、概ね住宅地区改良事業で、50戸未満の小規模な地区では密集住宅市街地整備促進事業（旧小規模炭住改良事業）によって実施されているようである。

田川市の炭住改良対象地区は、全て50戸以上の大規模団地であるため、全て住宅地区改良事業によって実施している。

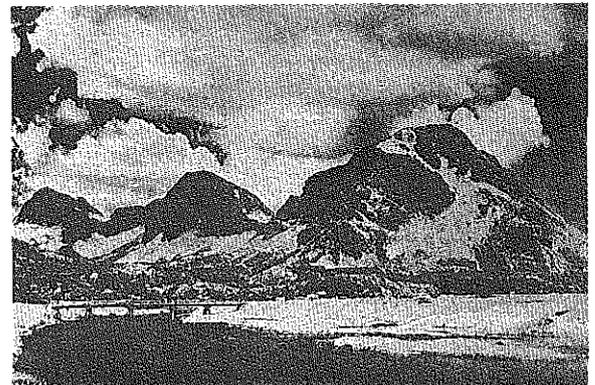
私が昭和56年からの田川市の炭鉱住宅改良の仕事に係わって今年で16年目を迎えたことになる。田川市に行くたびに香春岳が年々低くなっていくのを見るにつけ、その月日の経過を実感せざるを得ない。

田川市の炭鉱住宅のいくつかの改良計画に係わってきたのであるが、今回、当初段階から係わり、市内で最も大規模な炭鉱地区であった松原第2地区の改良計画のあゆみを報告したいと思う。

●昭和63年の見直しに伴う量から質への転換

本市の炭鉱住宅数は4,450戸（平成5年度福岡県産炭地域炭鉱住宅実態調査報告書）であり、現在のところ炭住改良を実施した地区、あるいは実施中の地区は11

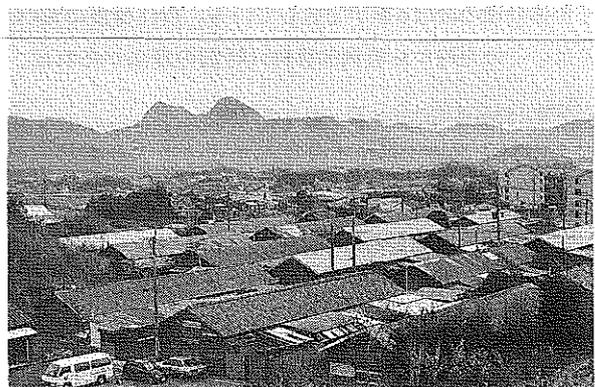
団地（炭鉱住宅数3,854戸）である。このうち、既に10団地、3,393戸は改良済み（改良率88%）であり、現



削り取られ始めた昭和10年頃の香春岳
（右から一ノ岳、二ノ岳、三ノ岳）



筑豊地域の炭鉱が全て閉山した後の昭和52年頃の香春岳
一ノ岳がかなり削られた



奥に見える2つ並んだ山の右側の単なる平地らしい山が
最近の一ノ岳手前は、未だ残っている炭鉱住宅

在申請中のものでは松原第2地区のみが未完了となっている。さらに地区改良の申請はしていないが、小規模な炭住が未だ600戸近く残っていることになる。

松原第2地区は田川市の中心市街地である後藤寺商店街から北東約2kmの丘陵地にあつて、利便性も高く、少し小高いところに上ると香春岳を真正面にみることができる。この地区の炭鉱住宅数は1,099戸、規模約26haという大規模な炭鉱住宅地区である。

当初計画段階では、事業の促進とオープンスペースの確保といった観点から、高層棟を2~3棟導入することも提案したものの、入居者の方々の同意を得ることができず、すべて中層住宅5階案となった。

当初はできるだけ事業を早く進めていくこと、市の単独費をできるだけ節約していくため、最も効率のよい5階建ての規格品を大量に供給し、配置計画においても南面平行配置、いわゆるハーモニカ団地といわれる空間に変化のない団地を形成していた。

しかし、昭和62年に市内部における炭鉱住宅改良に係わる打ち合わせを行った結果、①配置計画の見直し、②今後の管理体制、③持ち家施策の導入等の基本的な考え方が提示されている。

これに伴い、昭和63年に松原地区のみ抜本的な配置計画及び住棟・住戸計画の見直しを行った。この時に、住棟の方位を南面に問わず、多少振ってでも団地内道路や歩道に沿って配置し、街並みを構成するという「ストリートハウス」という考え方を導入するとともに、道路沿いにはヒューマンスケールに近い3~4階建てをできるだけ配置するように提案した。また、住戸・住棟プランについても階段室タイプから片廊下タイプ、雁行や切り妻屋根の採用等、従来の計画より変化のあるものを提案している。今では、見直し前の計画も含めて全体計画のほぼ6割が完成している。炭住改良においては、この当時から特例加算枠（特別の理由があれば、

特別に補助がつけられる仕組み：例えば雁行や傾斜屋根分の増額分等）が増えたこともあって、松原第2地区をはじめ、筑豊地域の他の市町村の改良住宅は質の高いものとなっているようである。この時期から改良住宅も量から質の時代へと転換してきたといえよう。

また、昨年度、松原第2地区では、事業開始後、既に15年を経過していることから、高齢者の死亡や転居によって空き家が増加し、計画戸数が99戸減少したことによる配置計画をはじめ、再度事業計画の見直しを行っている。

● 今後は管理問題が大きな課題である

この原稿作成のため、現地の写真を撮ろうと地区内をウロウロしていると、お年寄の方が庭いじりをしているのを見るにつけ、挨拶がわり「おばあさん、住心地をどうですか。」と投げかけてみた。するとおばあさんは「そうね。ずいぶん明るくなったけど、昔の長屋の方が開けっぴろげで住みよかったね。ただ、今は台風の心配ばせんでええのが何よりかの。」というようなことを言われた。このおばあさんは同じ住棟の4階に息子夫婦が住んでおり、いつも孫が行き来しているという。いわゆる改良住宅の世帯分離によって子供とスプの冷めない距離での安心した生活ができている方といえよう。また、ある年輩の男性の方に聞くと「昔

見直し前の改良住宅



標準タイプの住棟であり、南面平行の配置計画としている

見直し後の改良住宅



住棟デザイン自体に変化を与るとともに、「ストリートハウス」の手法を取り入れた配置計画

松原第2地区住宅改良の取り組みの経緯

- 昭和56年度 松原地区住宅改良基本計画策定
- 昭和56年度 住宅改良地区指定申請手続き
都市計画地方審議会答申
事業認可申請手続き
- 昭和57年度 第1期120戸建設
- 昭和63年度 全面的見直し計画策定
事業計画変更認可申請手続き
- 平成7年度 計画戸数減少に伴う事業計画見直し
事業計画変更認可申請手続き

の方がつきあいは良かったなあ。今は階数が分かれたいるので付き合いが薄くなっているように感じる。しかし、こんなハイカラなものができて地域イメージが良くなったなあ。」といういうことであった。

役所の担当の方に聞くと、入居者の意見としてはお年寄りの話の中で出てきたのと概ね同じであり、①明るくなり、採光時間も長くなったことから、健康上良くなったこと、②物置が各戸設けられているので、重宝していることなどがあげられた。あと地域的な視点から③圧倒的な地域のイメージを作っていた炭住がなくなることによって、炭鉱の町としてのイメージが変わってきていること、④建設業のための振興が大きいことがあげられた。

また、改良住宅を含めた公営住宅数が全世帯数の約3割となっている状況において、公営住宅の維持・修繕あるいは家賃滞納等も含めた管理問題が今後の大きな課題であるといえよう。(山田 龍雄)

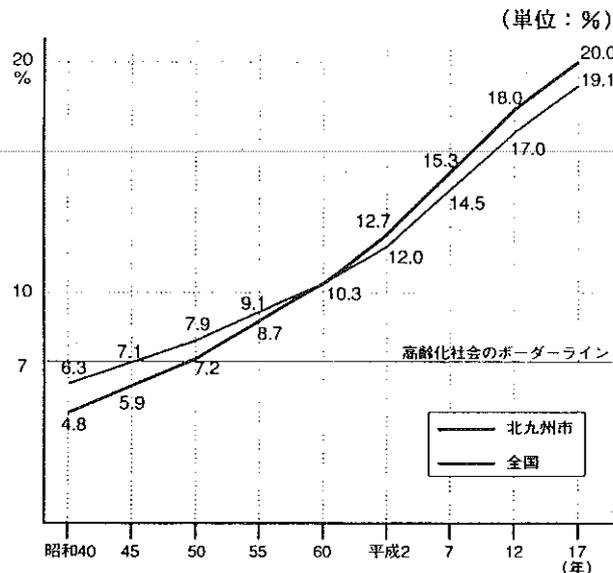
新しい時代の助け合いのかたちを考える

—長寿社会のまちづくり研究会から—

北九州市は厚生省の委託を受け二十四時間巡回型在宅ケアのモデル事業を1995年12月から行っている。行政がまちづくりの一環として福祉に取り組んだ例である。

2月22日、(社)長寿社会文化協会(WAC)の九州

北九州市の高齢化の推移と将来推計



資料) 全国は平成2年までは国勢調査、平成7年以降は厚生省人口問題研究所「日本の将来推計人口」(平成4年9月推計)の中位推計値

※高齢化社会
国連の定義では、高齢化率(総人口に占める65歳以上人口の割合)7%以上が高齢化社会としている。

北九州市の行政区別高齢人口比率

| | |
|------|-------|
| 門司区 | 16.7% |
| 小倉北区 | 13.5% |
| 小倉南区 | 11.1% |
| 若松区 | 15.1% |
| 八幡東区 | 18.5% |
| 八幡西区 | 12.7% |
| 戸畑区 | 14.7% |

資料) 平成4年9月住民基本台帳

活動グループである長寿社会のまちづくり研究会(代表山田龍雄)第8回勉強会が行われ、北九州市八幡東区の八幡東保健センター福祉部、杉原好則さんに八幡東区での高齢社会への取り組みについて話を伺うことができた。

●行政が安心して暮らせるまちづくりに取り組んだ

北九州市のなかでも特に八幡東区は、行政区別高齢人口比率は最も高く、平成6年9月には区人口86,243人に対し、高齢者の人口17,368人(20.1%)となった。

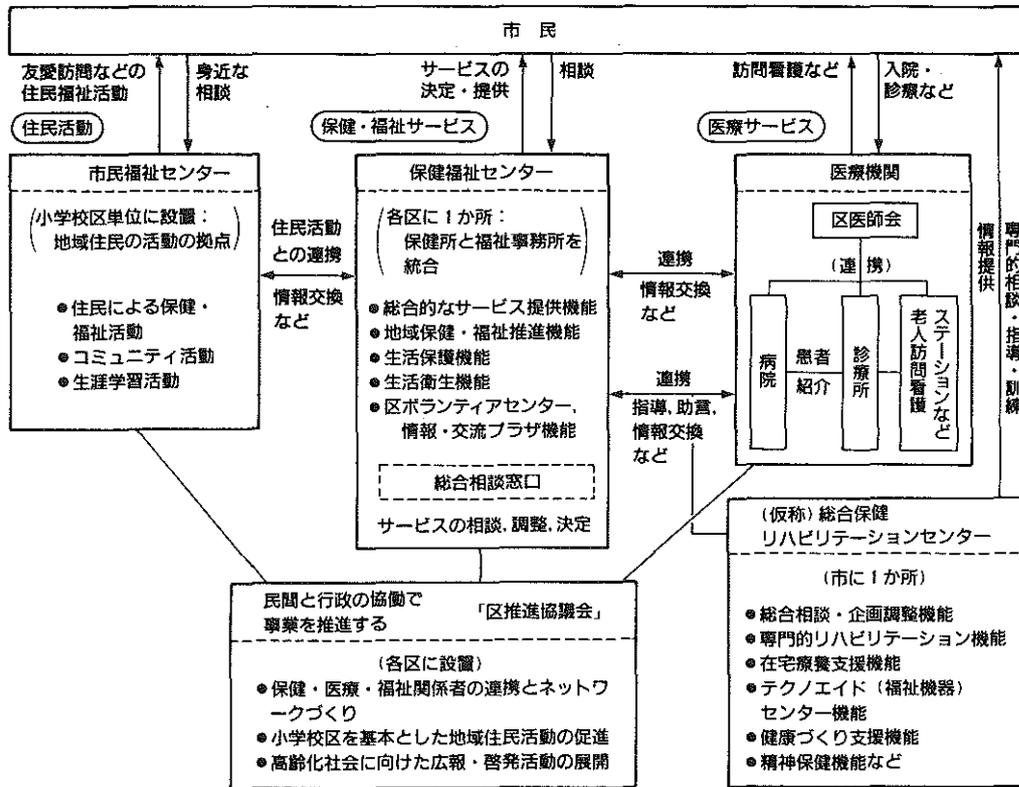
その原因として若者流出(新日鉄八幡製鉄所の工場移転により地域から若者は出ていったが、親は残ったというケースも考えられる)と出生率の減少などがあげられている。

こうした現状を踏まえ、「地域社会で高齢者の自立を支えながら、安心して暮らせるまち」をつくる取り組みが始められた。

●いつ何処で誰に何を相談するかを迷わせない

在宅介護を地域で支援しようという取り組みの柱のひとつとなったのが「機構改革」である。つまり、いつ・何処で・誰に・何を・相談したらよいか、介護の

八幡東区保健・医療・福祉総合連携システム概念図



不安、戸惑い、そして願いはどう伝えたらよいのか、という迷いをいっさいなくすために、地域と老人（介護者・要介護者）をつなぐ窓口を一本化した。

これらの取り組みは、医療・保健・福祉に地域という要素をプラスするというものであり、また医療・保健・福祉の境界を取り払うということでもあった。

これまでのように個人が各機関（施設、民間ヘルパー、病院など）に連絡をとり、その機関の管轄内の相談を持ち込むことでは、個人と一機関の一对一の情報交換でしかなかった。統一した唯一の窓口をつくることで、相談が持ち込まれば、窓口が指令塔となって、各機関、部門にサービスを分担できるようになった。これは、いずれの機関・部門も、個人を軸とした情報を共有する、また、要介護者を様々な視点から分析し、最も質の良いサービスは何かを客観的に判断する狙いがあった。個人の情報から、サービスの度合い、その質や内容、専門性などによって各機関、部門に分担することで、高齢者を幾重にも支えるサービスを提供できる体制づくり（サービスの選択肢づくりも含めて）が整えられた。

● “地縁的ボランティア” への移行

杉原さんの話のなかに、「成功例として取り上げられるが、この取り組みはあくまで八幡東区の場合であって、ほかでない。高齢社会の設計は、気候、風土、コミュニティの成熟度などの要因によって左右されるもので、本来、地域で確立していくべきである」「なにも特別なことではなく、住民のための行政サービスのあり方を示し、地域社会で高齢者が安心して生活を続けられるような地域づくりとはなにかを考えた結果だ」という言葉があった。そして、「今後はモーニングケア、イブニングケアの充実が必要であり、近所の人たちが中心となって活躍できる体制づくりに取り組みたい」と語られたのが印象に残った。

杉原さんのめざす“地縁的ボランティア”の体制は、健康を周囲の親しい友人とわかちあっていきいきと生きる、新しい助け合いのかたちとなるだろう。

公的介護保健制度の問題も含めて、今後の展開には課題も多いが、多様な選択を可能にする豊富で良質なサービスの提供体制づくりが求められていると思う。私は私なりに高齢社会を楽しく生きる知恵を養いたい。

（伊藤 加奈）

若者の住み続け意識＝
郷土のシンボル特化度×住み良さ評価

去る3月26日、久留米大学経済学部 駒田井正教授のお招きで、久留米大学産業経済研究所プロジェクト研究の「筑後川流域社会の実証研究」平成7年度第2回研究会に参加してみた。

参加者のエリアは地元の日田郡に限らず、福岡県側の一般の住民、行政関係者、教育関係者、大学の研究者など様々だった。

今回の研究会では、当事務所の糸乗が、平成7年度のNIRA（総合研究開発機構）からの助成を頂いて研究した「高齢者はなぜふるさとを離れていったのか」の研究報告を兼ねての基調講演も行った。

しかし、講演の後の質疑や意見はどちらかというと高齢者の話よりも、日田の町づくりや地域活性化について多く、地域づくりの基本のようなものについて改めて考えさせられた。

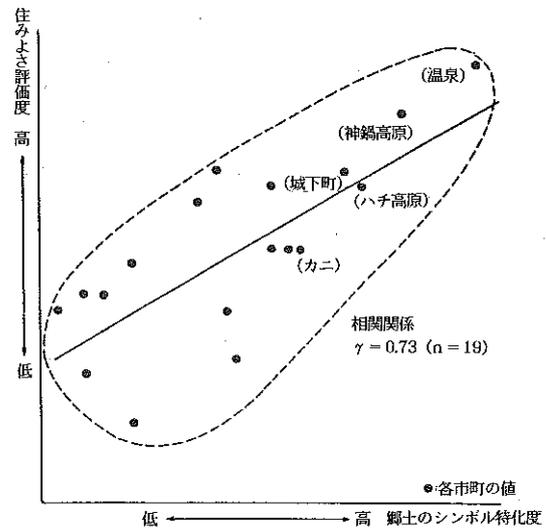
●豆田の文化資源に地元の若者が関心を持った

これは、地元の教育関係の仕事に携わっている方の話である。10年程前に日田市で地元の高校生に、アンケートを実施して日田のイメージを聞いてみたところ、「街並みが古くて魅力がない」というような意見が多かったという。

日田の歴史や文化のイメージというと豆田の街並みが挙げられる。今では街並みが整備され、古くからの家や店が建ち並び、中には140年前の商家を改築して喫茶店として復元したところもあって、若い女性を中心に観光客がやって来るようになってきているが、その資源に光が当たる前は、地元の若者の評価はそんな程度だったということだった。最近では、豆田の魅力を来街者が認めるようになって、逆に地元の若い人が「古くて情緒があっていい雰囲気」とプラス評価するようになってきている。

●就職だけでは住み続けない

地域のイメージ戦略というもの是非常に大事であると思うが、この話を受け、地域が注目を集めることで地域住民の住み良さ意識がアップする関係について、糸乗の方から、ある山村地域における地元高校生の「郷土のシンボル特化度と住み良さ評価度」の相関について



ある山村地域の高校生の住み続け意識

て補足説明を行った。

これは「有名であるところはアイデンティティーを持ちやすいし、住み良さも感じやすい」ということを端的に表しており、先の日田の高校生の話と関連して、単純だが説得力のある話であった。

地域活性化というと、どうしても儲かる話先だってしまうものだが、まず基本はしっかりとした地域のアイデンティティーを高めることが大事であり、住民が地域に対して愛着を持つようになることが大事である。

●見逃せない外からの視点

豆田の話でもう一つ見逃せないのは、観光客が地元の人々の評判に関係なく豆田を観光地としてとらえたことである。「灯台もと暗し」ではないが、地域の活性化計画では地域にある既存の資源を有効に生かすことが、無理のないアイデンティティづくりになるという基本的なことである。豆田の場合、町の雰囲気は近年の「お金は少なく使って優雅に時間を過ごす、何となく懐かしい雰囲気の街並み」という消費者の意識に合っていたことで評価されたのだと思われる。

日田にずっと住んでいた人にとっては見慣れた光景でも、違う視点をもった初めての来街者にとっては、とても親しみのあるものに見えるということであろう。

●一村一品の国で、産業の多極化という意見

研究会の中での議論は、主に日田市をはじめとする日田郡の産業新興などの方策についてであった。「人口減少に歯止めがかかるような特効薬があるのなら教えてくれ」「産業は工業誘致がよいだろうか」「何か特産

品の開発をした方がよいのではないか」などの意見もあった。

しかし、日田郡のように歴史を感じさせる街並みがあって、水の資源もあって、おまけに食べ物がうまい（川魚がおいしいというのは非常に魅力で、特に鰻と鮎は絶品）ところは、変に一品化するのほもったいないのではと思った。地域に密着した産業を考えるならば、むしろ、ゆったりした雰囲気を生かしたサービス産業ではないかと思った。

糸乗の方からは、九州にある某伝統工芸の町に喫茶店が見つからなかったことをめぐって、「もてなし型産業」の重要性と、一品型産業に留まらない様々な要素をもった多極的な産業づくりを進めてはどうかという意見が述べられた。

●次なるアイデンティティは筑後川をテーマに

日田のイメージは、現在でも筑後川の清流とは分けて考えられない。今回の研究会には、筑後川の上流域で「緑のダム」による筑後川の水源涵養などの運動を行っている「筑紫のみずがめの会」という会のメンバーが入っていた。

筑後川は福岡、大分、熊本、佐賀を流域にもつ大きな川で、これまで流域に恵みをもたらしてきた川である。現在も、飲料水を始め農業用水、工業用水などいろんな用途にその水が使われている。

記憶に新しい平成6～7年にかけて長期間続いた福岡都市圏の給水制限は、都市の水問題を大きくクローズアップさせた。しかし、水の重要性を強く感じていたのは給水制限で不自由を感じた福岡都市圏側よりも、むしろ、筑後川流域側の方なのかもしれない。「筑紫のみずがめの会」の方と話していると、水資源の重要性と有効利用をめぐって流域を自ら守っていこうという意見が大勢を占めていた。これは大昔からのこの地の人々のアイデンティティなのかもしれない。資源ナショナリズムという言葉があるが、水も資源である。水資源についての研究や流域経済などから新たな地域づくりを模索していきたいという次なる意欲が伝わってきた。

中には、今年90歳になるという御年輩の方が、張りのある声で地域づくりに関する質問をされていた。地域社会をどう作っていくのかという現実の問題に、高齢になっても真剣に取り組もうと考えておられるのを見て、たくましさを感じた。（尾崎 正利）

地域データ散歩①

若者地域定着の様子

先号の「一知半解事典」で、「地域の定員枠のようなもの」として、変な表を出しましたら、少々「面白い」という手紙などもいただいたので、悪のりして、暫くの間、あちこちの市町村のデータをとり上げて連載してみます。飽きたら別のデータに切りかえるということにしようと思います。

問題は、その地域（市町村）が「拡大再生産」なのか「縮小再生産」なのかということです。5歳階層のグループは大体16ぐらいある（0～4歳……75～79歳として）ので、1階層の定着枠の16倍が将来的に収斂する人口ということになります。

今回とりあげた宝珠山村は昭和55年頃は130人ぐらい定着する勢いを示していたのが、最近では60～80人ぐらいになりそうな傾向を示しています。一方、久留米市はどちらかというとも拡大傾向です。

●定員枠減少後固定化型：宝珠山村（右頁上）

この村の特徴は初等教育時にいた人々が、20～24歳時までで減少し続け、それ以降はそれほど変動がないところです。大体100人余で落ち着いており、100～120人が定住枠のようになっています。昭和36～40年生まれのグループが83人となっているので、このグループから枠が小さくなる虞もあります。

●地域定着発展型：久留米市（右頁下）

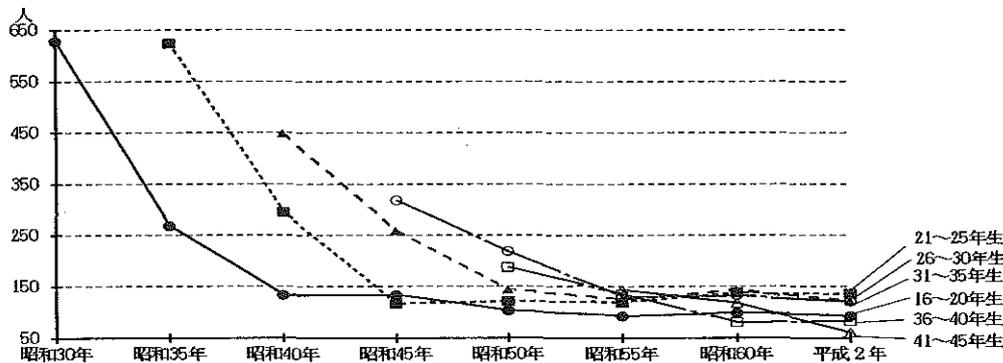
ここは25～29歳台になってからは変動は小さくなります。この市はワンパターンでなく、ずっと転出が多かったり、転入超過になったりしています。つまり、出る人がいても入る人もいるわけで、多様な動きを内包することによって地域社会が安定するという典型を示しています。第1次ベビーブーム世代は17千～18千人台の定着ですが、それ以降は14千人ベースとなり、第2次ベビーブームになるとまた少し増えています。一応発展しているようですが、それが定着数がどうかは、H7年の国調をみないとわからないといったところでしょうか。（糸乗 貞喜）

| 国勢調査 | 調査年 | 昭和30年 | 昭和35年 | 昭和40年 | 昭和45年 | 昭和50年 | 昭和55年 | 昭和60年 | 平成2年 | |
|------|-----|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| | | 628 100.0% | 268 42.7% | 133 21.2% | 133 21.2% | 103 16.4% | 93 14.8% | 99 15.8% | 93 14.8% | 昭和 16~20年生 |
| | | | 624 100.0% | 295 47.3% | 117 18.8% | 122 19.6% | 120 19.2% | 138 22.1% | 136 21.8% | 昭和 21~25年生 |
| | | | | 448 100.0% | 259 57.8% | 144 32.1% | 125 27.9% | 143 31.9% | 122 27.2% | 昭和 26~30年生 |
| | | | | | 317 100.0% | 218 68.8% | 131 41.3% | 132 41.6% | 120 37.9% | 昭和 31~35年生 |
| | | | | | | 187 100.0% | 135 72.2% | 80 42.8% | 83 44.4% | 昭和 36~40年生 |
| | | | | | | | 143 100.0% | 117 81.8% | 59 41.3% | 昭和 41~45年生 |
| | | | | | | | | 135 100.0% | 108 80.0% | 昭和 46~50年生 |
| | | | | | | | | | 136 100.0% | 昭和 51~55年生 |
| | | | | | | | | | 92 | |
| | | | | | | | | | 99 | |

平成2年国勢調査
0~4歳 13,289
5~9歳 14,905

資料：「国勢調査」

宝珠山村の定着率
(男女計)

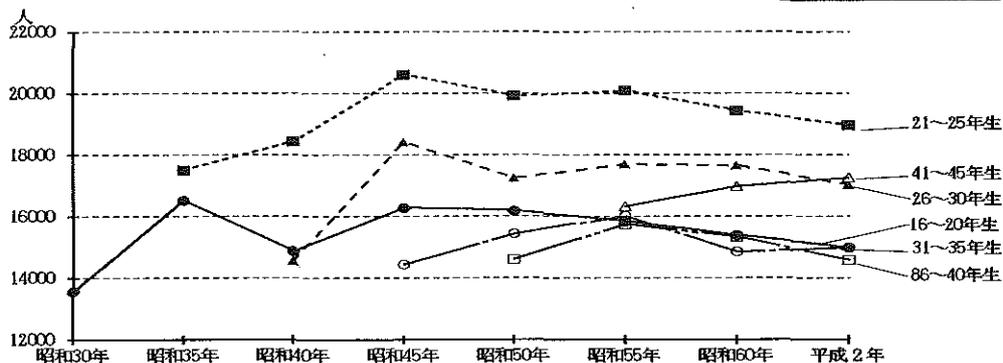


| 国勢調査 | 調査年 | 昭和30年 | 昭和35年 | 昭和40年 | 昭和45年 | 昭和50年 | 昭和55年 | 昭和60年 | 平成2年 | |
|------|-----|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|---------------|
| | | 13,555 100.0% | 16,510 121.8% | 14,870 109.7% | 16,279 120.1% | 16,171 119.3% | 15,829 116.8% | 15,372 113.4% | 14,980 110.5% | 昭和 16~20年生 |
| | | | 17,511 100.0% | 18,431 105.3% | 20,617 117.7% | 19,916 113.7% | 20,090 114.7% | 19,437 111.0% | 18,969 108.3% | 昭和 21~25年生 |
| | | | | 14,548 100.0% | 18,410 126.5% | 17,244 118.5% | 17,688 121.6% | 17,652 121.3% | 17,024 117.0% | 昭和 26~30年生 |
| | | | | | 14,426 100.0% | 15,423 106.9% | 15,999 110.9% | 14,843 102.9% | 14,976 103.8% | 昭和 31~35年生 |
| | | | | | | 14,632 100.0% | 15,735 107.5% | 15,325 104.7% | 14,576 99.6% | 昭和 36~40年生 |
| | | | | | | | 16,314 100.0% | 16,970 104.0% | 17,246 105.7% | 昭和 41~45年生 |
| | | | | | | | | 135 100.0% | 108 80.0% | 昭和 46~50年生 |
| | | | | | | | | | 136 100.0% | 昭和 51~55年生 |
| | | | | | | | | | 13,289 | |
| | | | | | | | | | 14,905 | |

平成2年国勢調査
0~4歳 13,289
5~9歳 14,905

資料：「国勢調査」

久留米市の定着率
(男女計)



地域計画のための一知半解事典②

地域資源さがし、資料マップづくり

地域づくりには、ふたつのタイプのプロの協力があるといいと思っている。その一方は他所もののプロである。少々おこがましいが、このプロの資質はデータづくりに長けており、状況やデータを客観的に見ると同時に主観的に考える気力があり、なおかつ謙虚であり、そのようなことでメシを食っている人のことである。もう一方は地元の人、つまり地域社会の中でメシを食っており、地元のことなら何でも知っているようなプロである。

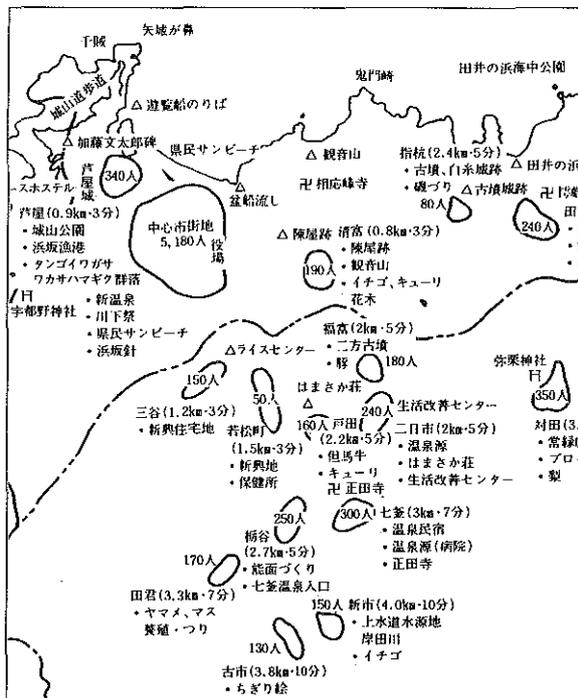
他所もののプロには謙虚な資質が必要と述べたが、それは胃袋についても云える。地元の資源をプラス指向で聞き出し、うけとめ、それをすぐに整理したり咀嚼したり加工したりせずに、胃がもたれたり口からあふれそうになっても我慢しながら、地元の人たちと一緒に苦しむ続けなければならない。

一方地元の人たちは、地元にあるコトやモノについて遠慮なしに出す方がよい。得てして、地元の人たちは資源の過少評価をしがちである。

このようにして発見した資源(コト・モノ)を、双方が口に頬張って涙を出しながら我慢をしていると、何かしかの考えが生まれる。少々ヒマがいるが仕方がない。

ここに示した図は、昭和53年であったと思うが、ある町で基本構想をつくる時、町役場の若手10人ぐらいと共同で、地図の上にトレーシングペーパーをのせて書きこんでいったものである。単位となったのは集落である。以前に別の町でメッシュのようなことをやりかけたことがあったが、方形メッシュは全く始末に

地域資源マップーモノだけでなくコト(ちぎり絵等)も資源として重視した



おえない。メッシュといっても、大小、形もちがう非整形メッシュ(集落)がよいと考えた。

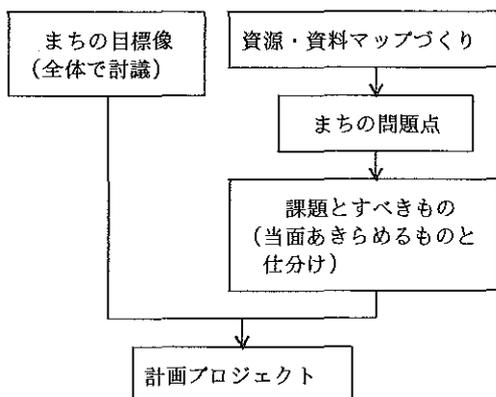
この図は、計画がきまってレポートにした段階で印刷したものであるので、かなりきれいになっているが、全員で資源さがしをした時は大変な書き込みでわけのわからないような地図になってしまった。その前だったか後だったかに、全員で町内探検もした。

注目してほしいのは、合併前の旧村の人口と特徴、それを構成する集落ごとの人口、特徴をベースに、モノだけでなく、祭りや行事、技能などのソフト分野を評価するようにしたことである。つまり「各集落ごとの特色、行事、特産開発運動」のもとを作ったことである。

計画チームでこの資料をもとに議論して、全町の計画テーマとプロジェクトを決めていった。何でもかんでも地図を前にしてやっていったのである。

このチームの成績はよく、この結果、数十億円の投資プロジェクト、町民と協力するようなソフトプロジェクトが生まれていった。結果的にいうと、数百万円がそれだけの投資効果を生み、今も活用されていることになっている。いずれ、これらをまとめて、「計画の経済効果」というようなことにまとめてみたいと思っている。(糸乗 貞喜)

資源・資料マップづくりのフロー



住民の手で守り、活用している民家

—津屋崎千軒民俗館「藍の家」—

●今、古い貴重な民家が失われている

津屋崎町とは違う町の話となるが、現在、福岡県嘉穂町というところの「まちづくり」のお手伝いをしており、町民の代表者の方と一緒に町の資源を見つめ直すための手がかりのひとつとして資源探訪を行った。この探訪の中で特に印象的であったのが、江戸末期から明治後半にかけて創られた民家・商家が、未だ多く残されていることであり、残っている家では「おばあさん」が一人で広い民家を持って余しながらも維持しつづけている状況であった。逆に後継者が残っている家では、周りの風景になじまないモダンな家に建て替えられていた。古い民家すべてが立派で保存すべき建物かどうかはわからないが、私たちが見て歩いた建物は、一尺もあろうかと思われる「ケヤキ」の柱、杉板一枚物を使っている襖、畳2畳程の銀杏一枚物の床板等々、今では手に入らない材料を使用しており、また、天井も高く、その空間の豊かさは今の住宅には味わえないものばかりであった。

たぶん全国的にみても、今、これらの貴重な民家が失われつつあると思われる。

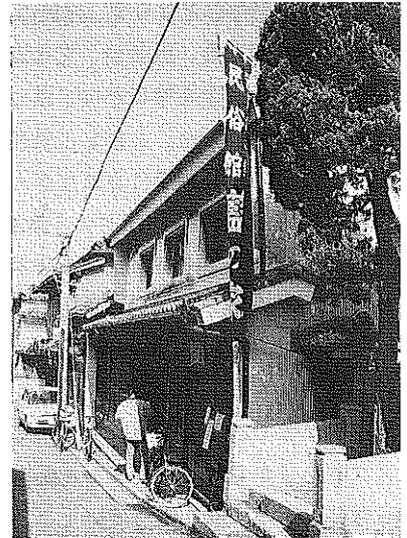
そこで、福岡県津屋崎町で、住民自ら保存運動を展開し、活用している民家の視察を行ったので報告したいと思う。

●海上交易の拠点として発展した「津屋崎千軒」

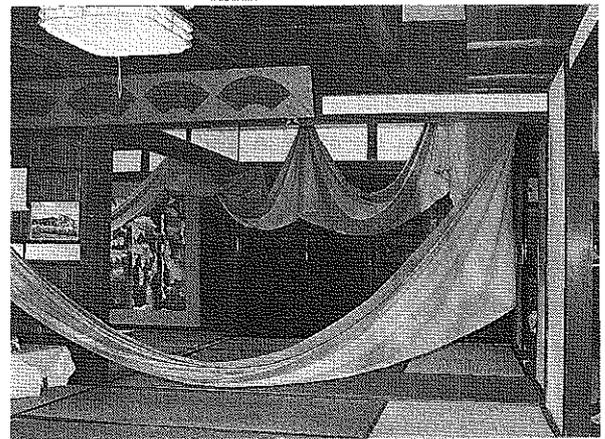
津屋崎町を含む宗像地方の海岸部には、古くから「宗像海人族」と称される古代の人々やその子孫が住んでいたといわれており、町の東側の山々の麓には数多くの住居跡や古墳が発掘されている。本町は、次第に砂が溜まり浅くなった入り江を、田畑や塩田として300年程前から幾度となく干拓し、今の津屋崎町を形成したと伝えられている。

また、海上交易については、かつて黒田藩が博多湾岸の船は全て漁業のみに従事させ、いざという時には水軍の船の漕ぎ手として直ぐに招集できるようにし、それ以外の港の船で海上交易を認めていた。津屋崎町の港は海上交易の港として認められ、博多湾の外港として宗像・粕屋・鞍手地方の物産の積み出し、流入港として江戸時代から明治、大正まで栄え、「津屋崎千軒」

右：民俗館
「藍の家」外観



下：野染めの布を
垂らした広間



と呼ばれるようになったということである。ちなみに「千軒」とは、人家が千軒もあるほど繁栄している町だという意味であり、当時、いかににぎやかな通りであったのかが偲ばれる。

今でも、狭い道路沿いに建ち並んでいる街並みに、その面影が残されているものの、今は人通りも少なく「千軒」という名だけが残っているのである。

津屋崎千軒民俗館「藍の家」は、この千軒の一角に位置している。

●イベントによる保存運動の盛り上がり

「藍の家」は、明治34年に建築された元染物紺屋をしていた上妻家の住居であった。保存の発端は平成2年頃、持ち主の方が、古くなった家での生活が何かと不便になり、近くに新居を建ててそこに移られたことからである。その後、空き家になって家の老朽化が進んできたため、解体して駐車場にしてしまおうということになった。この解体の話が地域に伝わり、町のリゾート開発に反対していたグループ「自然と開発を考える

会」の方々を中心となって、住民の会、郷土史研究会、観光協会、商工会、区長会、文化協会、町議員など多方面に、その保存を呼びかけ、話し合いを行い、町に度々お願いに伺った。しかし、当初は税金の無駄使いということで全く相手にされなかったそうである。

その一方で、平成3年8月に「街並み保存協議会」を発足し、「街並み探検と旧上妻邸の歴史と建築としての価値を知る学習会」、「旧上妻邸の活用を考える学習会」、「民家の愛称募集」などの運動を行ってきた。

この間にも町へ保存の呼びかけを行ったが、前向きな返事がなく、これ以上待っていても町の動きがいつになるか分からないということから、本格的に住民自ら保存・活用に取り組んでいくことになったとのことである。このような時に、現代美術の研究や展覧会の企画をしている津屋崎在住の阿部文範さんを知り、「藍の家」で現代美術展を開催することになった。

この展覧会は1ヶ月に約2,000人が訪れ、さらに会期中のシンポジウムにも130人も来るという大成功の結果、町や議会等もこの「藍の家」の存在を見直し、「藍の家」の保存に対し、町の方でも多少の援助を行うことが決定したとのことであった。

町と持ち主との契約関係は、建物は町に無償提供、土地は持ち主のままであり、現在月々約3万円の地代を払っているとのことである。

この民家の保存は、持ち主が移転し、持ち主の理解を得られたことなどタイミングが良かったこともあるが、有志の方々の熱心な取り組みの結果である。

●160人の会員の確保と多彩な民家の活用

「藍の家」の運営は「街並み保存委員会」のメンバーの方が中心となって行っており、「藍の家」の当番を100人のメンバーで午前、午後とそれぞれ2人ずつのローテーションを組んで行っている。この当番は今のところボランティアとのことであった。その運営費については町の「ふるさと創生」の基金からの助成金、「藍の家」で販売しているおみやげの売り上げ、会員の年会費(1,000円)や賛助会員費によってなされており、平成8年度での収入予定は約350万円で、うち230万円が町の助成金となっている。

本年度も月ごとに色々なイベントを予定されているようで、特に古い民家の中での「オカリナ演奏会」や「一人芝居」などは魅力的であろうと思われ、是非一度はおじゃましてみたいものと思っている。

「藍の家」の1996年度の活動計画

1. 新春コンサートin「藍の家」: 荒尾ルミ子ハーブ演奏会
1月27日(土) 14:00~15:00
2. 第2回 節句人形展
4月5日(金)~15日(月)
3. 三曲演奏会: 中村拝山(津屋崎町宮司)
一尺八他琴、三味線による合奏
4月21日(日) 13:30~15:00
4. 街並みスケッチ会 5月12日(日)
5. 街並みスケッチ会作品と津屋崎町陶芸同好会
作品展 6月1日(土)~10日(月)
6. 日高まり子さんによるオカリナ演奏会
5月25日~26日 会場整理券発行(500円)
7. 第2回「藍の家」染織展
10月10日(木)~20日(日)
8. 第2回「野染め」in津屋崎
秋頃予定 参加費1,000円(小学生500円)
9. 西村恵子の一人芝居
11月16日(土)、17日(日)の2日
会場整理券発行(500円)
10. ミニ・コンサートやミニ演芸予定
11. 講演会予定

※連絡先: 津屋崎観光協会 TEL 0940-52-1122

いずれにしてもこの「藍の家」は、自治体が建てるどんな立派なコンクリートの建物より、住民の方々の取り組みも含めて何倍もの価値があるように思われた。

(山田 龍雄)

白壁土蔵は起きている

—福岡県吉井町のおひなさまめぐり—

●単なる町並み保存からまちづくりへ

あるまちづくりグループに同行して、吉井町のおひなさまめぐりに行って来た。

吉井町は久留米市と日田市の中間点にあり、豊後街道沿いの宿場町として栄えた。江戸時代には何度か大火に見舞われ、その頃から類焼をのがれるために白壁土蔵の家が造られ始めている。

吉井町は、「白壁土蔵の町並み」と「小さな美術館めぐり」で有名になった。しかし、吉井町の名前をまちづくり事例として聞き始めたのは割合最近で、住民の気運が盛り上がってきたのも、平成4年に「全国町並みゼミ」を吉井町で開催して、全国の人から町並みに高い評価をもらってからだそう。それまでも町並み保存はあったが、単に保存活動をしていただけで、まちづくりにはなっていなかったらしい。それがここ数年ではじまった住民の様々な活動により、一躍有名なま



白壁のまちなみで偶然出会った鏝絵の作成現場

ちづくり事例となっている。

まちづくりとしては特別にハード整備をすることもなく（町並みの保全・改修は町が個人に助成してる）、喫茶店やお菓子屋、個人住宅などをギャラリーとして開放することにより、美術品やおひなさまを展示している。

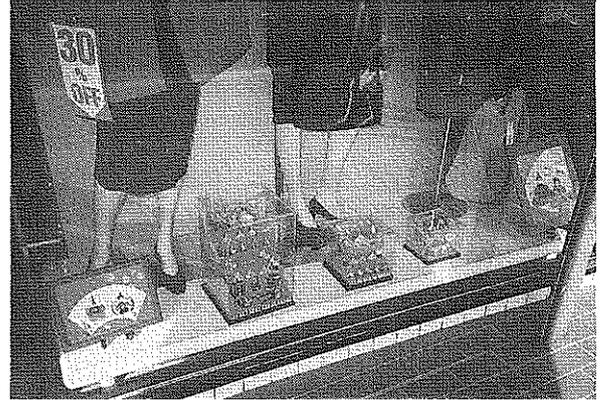
●「めぐり」の効果

吉井のおひなさまめぐりは日田市のひなまつりを真似て始めたそうだが、今年で4回目とまだ歴史は浅い。「おひなさまめぐり」は、「小さな美術館めぐり」もそうだが、歩き回って同時に町並みも見てもらいたいという気持ちが名前に込められている。これはいわば博物館などでいう常設展と特別企画が行われているようなものだ。

その「めぐり」のおかげで、白壁を補修中の家で大黒さまの鏝絵を作っている（描いている？）ところに出くわした。歴史的な雰囲気なかで職人の技術を見せられるというのは、民芸村などで紙漉きや独樂づくりをみるのとやや似てる。似てはいるが、思わず出くわすところとやらせでないところがいい。やらせでも楽しいものは十分楽しいが。

また、吉井では庶民的なおひなさまの展示を目指していて、入場料を取るところは少ない。古美術屋が集めた珍しいおひなさまの数々から、洋服屋のショーウィンドーの片隅に置かれた小さなおひなさままで様々なものを見ることができる。

この気軽さは、観光客が見て回りやすいのと同時に、まちのひとがささやかなおひなさまを飾るだけで、簡単に「私もまちづくりに参加している」という気分になれるのがよい。



洋品店のショーウィンドーに並んだ小さなおひなさま

●装飾古墳は眠っている

町の中心部が取り沙汰される一方、^{めづらしづか}珍敷塚古墳など装飾古墳の貴重なものもあるが、同じ歴史的なものでもまちづくりの資源としてはあまり認められていない。町おこし課の人の話でも、古墳に関しては郷土史会がやっている程度ということだった。もちろん、古墳を見に行けば郷土史会の方は親切に説明してくれる。

誰かに「これは素晴らしい」と認めてもらわなければ自分たちも認めない、あるいは気づかない、という傾向はよくあることと思われる。しかし、吉井町のようにまちの資源をうまく活用しているところでも、一方では別の資源を眠らせている、ということがあるようだ。場合によっては、ある部分が有名になることで、他の資源がかえって陰に隠れてしまうこともあるかも知れない。あるいは、白壁土蔵はかっこいいが古墳はいまいち、と思われているか。

確かに、古墳よりも白壁の町並みの方がまちおこしとして扱いやすいだろうというのは分かる（でも古墳でまちおこしをしているところもある）。特別吉井町のことを言うわけではないが、今価値があると思われていないものは、今後も価値が出ないとは言えない。

吉井町はまだ活動が始まってから短いので、これから他の資源にも目が向くと思うが、まちの人たちが自分の目で様々な価値を見出し、それぞれに保存なり活用なりしていくことが必要だろうと思われる。

（伊藤 聡）

佐伯市の観光拠点は駅前寿司屋

●人通りは少ないが、客の出入りは盛んな寿司屋

ある調査で大分県の佐伯市を訪れる機会があった。ちょうど佐伯駅に着いたのが昼時であったため、同伴の人が「駅前に確か美味しい寿司屋があったので、そこで食べましょう。」というので行くことになった。駅は市の中心部から2km程離れているため駅前商店街というものもなく、なんとなく裏寂しい雰囲気のところ、本当に美味しい寿司屋があるのか半信半疑だったが、少しウロウロと探し歩いていると目指す「錦寿司」の看板が目に入った。

私たちは通常のランチメニューと思われる「1,500円の寿司定食」を頼むと、これが噂に違わず感激の一品であった。ネタは新鮮であり、また、ジャリの3倍ぐらゐある「あなご」をはじめ、どのネタも大きく、到底一口では食べられない物ばかりであった。人通りのないところに位置している割には客の出入りが頻繁であった。

●企画課長曰く、駅前寿司屋が観光拠点かな……

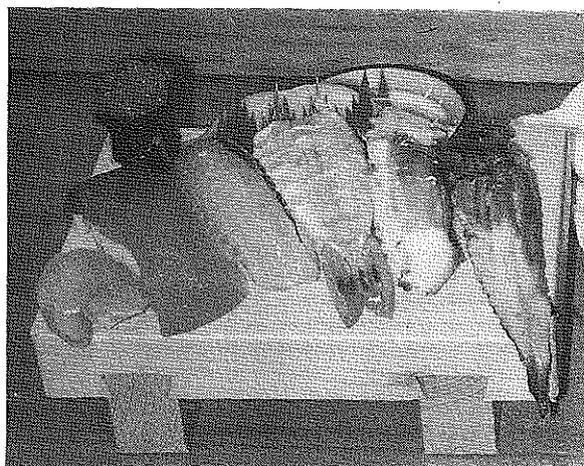
腹ごしらえも済み、市の方に出向き、企画課の方にヒアリングをしている中で、「市の観光施設の状況についてお聞きしたいのですが……」といった途端、即座に課長さんから「佐伯市にはこれといった観光施設はないんですよ。強いて言えば駅前の寿司屋ぐらいかな。」といった答えが返ってきた。本当にこの返事には驚かされた。聞くところによると、この店は相当有名らしく、わざわざ大分市内や市の後背地の山間部の方からも車で駆けつけて、利用しているとのことであった。まさに市の広域観光拠点施設なのであった。

●特徴あるものが人を呼ぶ

佐伯市は、毛利高政氏が築いた佐伯城を中心として城下町が構築され、今でも街中に長い土塀や武家屋敷などの藩政時代の面影を留めているところもある。

また、有名なのは、プロ野球選手を多く誕生させていることであり、ちなみに広島カープの阿南元監督、野村選手、ヤクルトの川崎投手などがいる。

しかし、市の総合計画では、「観光資源は数多いものの整備が不十分で、広域的に観光客を引きつける観光ポイントになっていない」といった課題があげられて



板からはみ出たネタ

おり、観光面ではこれといった特徴がないのが実状であろう。

この寿司屋を見て、「よかネットNO12」のやぶにらみ九州論の中で「観光は横着な産業である。客を遠路はるばる来させて、地元の産品を売りつけ、地元の労働力でサービスし、原則として物を渡さない」という言葉を思い出した。当たり前の話であるが、観光は特色あるものを創れば遠くからでも人が集まるのであり、この寿司屋さんの話は、ちょっとした一例といえよう。 (山田 龍雄)

私 の 近 況

指宿温泉というところにあこがれていた

指宿温泉の観光ポスターを見ると、美人が砂蒸しをしているところが出ている。見るからに身体がほぐれて疲れがとれそうで、一度行ってみたいと思っていた。それを充たすために、仕事の途次の空いた休日に足をのぼして泊ってみた。

砂蒸し温泉はたしかに機能としては納得できたが、雰囲気は観光ポスターと程遠かった。砂の温度とか安全の管理のためにはやむを得ないのかもしれないが、コンクリートでしつらえたところで、機械的に砂に埋められていったのでは気分がでない。710円という値はもっと高くてもいいから、何とかならないのかと思った。観光客の立場からみると1000円と700円の差はないのではないか。

それ以外に行くところについてはタクシーの運転手さんに聞いてみたが、「長崎鼻に行くことになっている」と言われても、曇り空のもとで20kmもタクシーで行く気がしなかった。

街の結構は3万人余の人口の割には小さいように見えた。飲み屋も一人旅では二の足を踏む感じであり、全体が団体旅行を迎えるシステムになっているようである。それでも昼の食事は2,296円だったり、団体客と一緒にされてはかなわないと思って観光協会に紹介していただいた民宿の勘定が1円単位まであったりする。関西から博多あたりまでは、ほぼ消えている消費税の外税が指宿で現れる。つまり東京並のハイカラな面も持っている。

街のサービスが団体客向きのものであっても、実際には、一緒に砂蒸しに入った人などは2人から数人のグループばかりであった。

小生は国外へ旅行したときでも、帰ってからガイド本を買うような横着ものであるが、この原稿を書くために百科事典を見たところ、指宿は「湯豊宿(ゆぶしゅく)に由来」とか、「カンショの新品種研究で知られる農業試験場」、「市南部には弥生と縄文の土器が層位的に出土した遺跡として知られる指宿橋牟礼川遺跡がある」などと書かれている。これではもう二度と来ないだろうと思ったが、なんだか気分がゆらいでいる。指宿にお願いしたいのは、もっと多様な客に対する配慮である。なぜはじめから、一般のガイド本(今回は一応目を通していた)にも百科事典のようなことが記載されていなかったのか残念である。

最後に一言自慢すると、地元の人への入湯をみつけて150円也で誰もいない朝風呂に入ってきた。これで15分1000~1500円といった大都市で若い娘さんが入って流行っているようなマッサージがあったらいいのに……。砂蒸しのところでやれば確実に売れると思う。

(糸乗 貞喜)

自給できる地域づくり

佐賀市での学研都市づくりの研究会において、「農の共生」に関する勉強会の時に聞いた話を紹介したい。現在、国内で消費される食糧は、農産物、水産物、畜産物など、我々が日々口に出している食品の大部分が外国からの輸入に頼っていることは、周知の事実である。このうちの農産物、あるいは畜産物も含まれるかもしれないが、国内の農業生産に寄与している土地は、約530

万haある。このうち九州8県には70万haの農用地、佐賀県には約24万haある。しかし、これだけでは、日本の人口約1億5千万人の食欲はまかなえないため、外国の農地を借りて、輸入をしていることになる。それを計算すると、国内の農地の2倍以上の約1,200万haの外国農地を借りて生産していることになるのである。この数値がどうやって出てきたのかは確かめなかったが、相当規模の国外の農地が日本人のために使われていると聞くと、今の日本の食糧事情は、このまま輸入に頼るだけで大丈夫なのかと心配になった。

仕事柄、農山村の活性化などの場面に出くわすこともあるが、地元の人々は食糧生産以外の手っとり早い収入に走りがちであるが、地域の自立をお手伝いをする我々を含めて、もっと自給できる地域づくりをみんなが真剣に考えなければと強く感じた研究会であった。都市と農村の交流、グリーンツーリズムなどの地域活性化方策も都市住民が農業を理解するという意味で重要な側面であるが、農業を産業として捉え、食糧生産業の確立をしないと、徐々に中国の国内消費量も増加してきている状況からも、今まで、口にしていたものがだんだん入らなくなる時代になるのではないかという新たな心配の種が芽生えてしまった。

(山辺 真一)

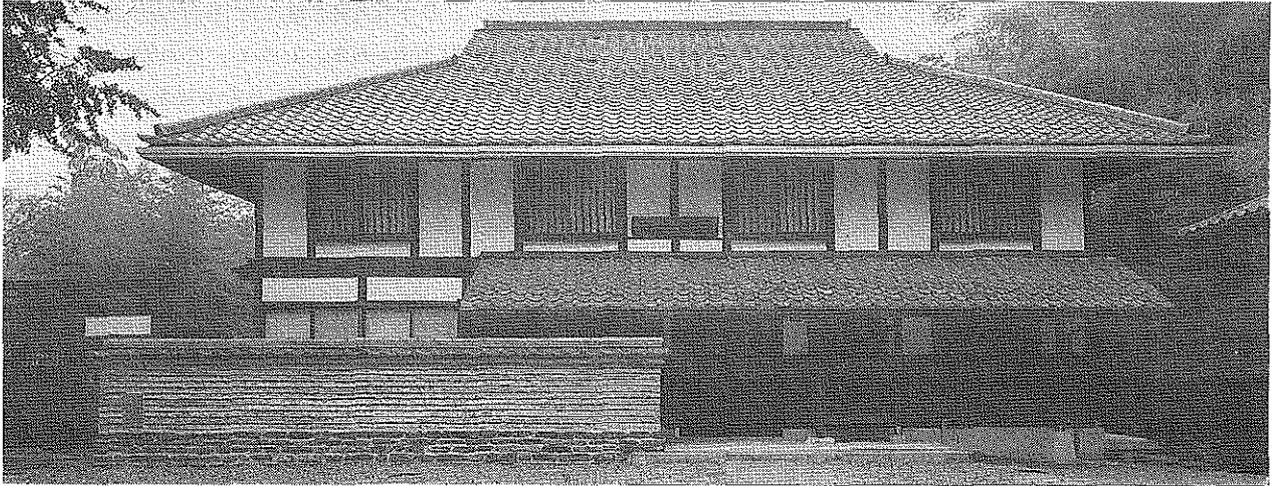
楽しい田舎暮らし、クラインガルテン

「サラリーマンシニアの現代田舎暮らし」(シニアプラン開発機構編)を読んだ。第1章では、「田舎暮らし」を実践されている4人の方の例が紹介され、第2章では、津端修一さんと奥様の英子さんが、「私のクラインガルテン・20年」「私のクラインガルテン12カ月」として、長年にわたって作り上げられた自然とふれあう豊かな暮らしについて書かれている。

クラインガルテン、これは「小さな庭」を意味するドイツ語で、ここでは津端さんの田舎暮らしや、これまでの活動も示されているようだ。

津端さんとクラインガルテンとの初めての出会いは、1979年で、西独のクラインガルテンという市民運動に感動されたことから、自然と共に暮らす新しい生き方を始められたとのことだ。

実際自分で土を養い木や野菜や花を育てることは、楽しみだけでなく様々な苦勞が伴うことだと思うが、お二人の書かれたものを読む限りでは、喜びと楽しみの方が大きいように感じられた。季節毎の木や花に囲ま



正面からみた「有智山荘」

5人以上から、1500円程度で食事もできます。一度足を運んでみてはいかがでしょうか。

れ、本当においしくて安全な野菜を食べることが出来て、これこそ幸せというものだととても羨ましく思うが、では私も倣って実行できるかといわれると、なかなか難しい。今のところは、英子さんの書かれた12カ月の生活を楽しく読ませていただこうと思う。

(富重 慶子)

有智山荘を訪ねて

「有智山荘」は西鉄太宰府駅から車で10分ほど走ったところ、かまど神社の近くにある。先日、この山荘の見学会があり参加した。

この家は、江戸、明治初期の民家や農家、酒造屋、博労(馬問屋)などの解体材を使って建てられたものであり、2階に見えるせりだし部分には時代劇によく見られる雰囲気を感じられた。

入り口を入ると大きな広間があり、落とし込み式の囲炉裏に座ると足元がポカポカして気持ちがいい。ここは「修羅の間」といい、その名前は、囲炉裏のそばに立つ上部が二股になった太い柱「修羅」に由来している。「修羅」は大きな石を運ぶ際に使われた櫓(けやき)の自然木で、二股になった部分に重いものを乗せ、一方の胴を振りながら、てこの原理を応用して前進するしくみになっている。

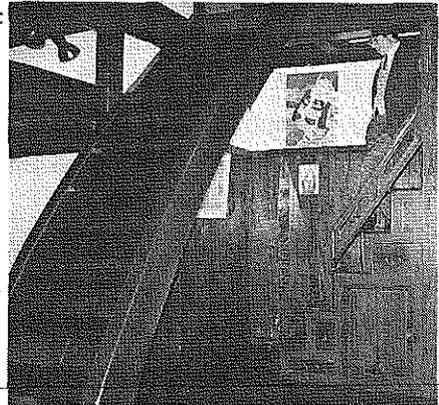
昔の家屋には、ずっしりとした迫力があるだけでなく、使いやすさ、快適性の面でも納得させられることが多く、箱階段などもそのひとつで、スペースを有効に利用するための知恵が感じられる。

この家の中にはととなりあって2つの階段があり、写真の左側に見えるのが上り専用、そして右側の箱階段が

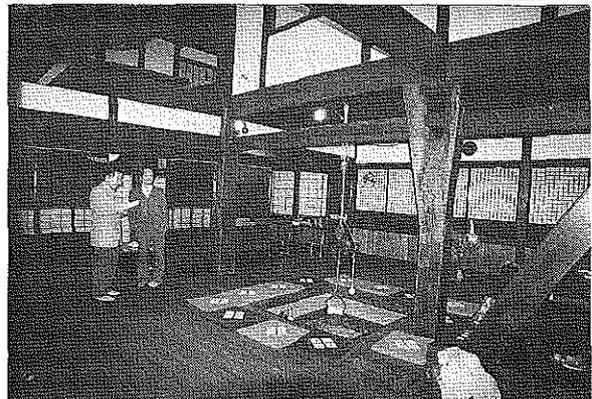
下り専用と標示してある。上り専用階段には微妙なカーブが施してあり、そのため前傾姿勢をとる格好となる。自然と階段の縁を握ることとなり、高所恐怖症の私にとっては安心感のある上り心地である。

有智山荘の木材ひとつひとつには、ここに運ばれてくるまでの色々な歴史が染み込んでおり、丹念に磨き込まれ、角がすり減った障子の格子などからも、当時

右：上り階段と下り階段



「修羅の間」右の二股の柱が「修羅」



の住人の住まいに対する想いが偲ばれる。

しかし、長年支えてきた家を離れ、移住してきた柱や梁達は、お互いが拒否反応を起こし、ミシミシと音を立てて喧嘩をすることもあつたらしくそのための治療に手を焼いたこともあつたとのこと。

そんな話をご主人の高松さんから伺いながら、ひととき豊かな気分を味わうことができた。

有智山荘は、多目的なコミュニティ施設として建てられたものであり、事前の連絡をすれば3人～40人分の食事、また、セミナーの会場として利用することもでき、屋外には、鍋なら200人、バーベキューなら60人分もの調理が出来る作業場がある。何かの折に触れて利用してみたいはかがでしょうか。

(金川 薫)

☞ うらしま太郎活動中

先日、遠賀町の「福祉まつり」で高齢者疑似体験「うらしま太郎」の体験会を行った。

会場となった「ふれあいの里センター」は町の福祉拠点であり、この日も障害者の方のバザーや、盲導犬の紹介、落語などのイベントが催され、大盛況であった。

今回の「うらしま太郎」の体験者は、ほとんどがボランティア等で活動されているヘルパーさんだった。ある程度はお年寄りの不自由さを理解されていたと思うが、今回の疑似体験により、「目と耳が不自由になるとストレスを感じる」「耳が聞こえづらくなり孤立したように思えた」など、心理的な面で不自由さを実感されていたようだ。

(歌丸 星子)

☞ “美味しかった” 甘夏みかん

一昨年の「よかネットパーティ」に地ビールやビールのベストなどを持ってきてくださった、ガイアみなまたの柳田さんから甘夏みかんを送っていただいた。

これは、「生産者グループきばる」という、19年前に水俣病患者運動の中から生まれたグループの方が作られたものとのことで、贈り物などに是非使って下さいとの御紹介だった。みずみずしくて甘くて、早速所員でいくつかお願いすることにした。

何よりもうれしいのは、こちらでは自然を大切にしたい農法にこだわり、実が大きくなる時期からは農薬を散布せず、防腐剤やワックスも使っていないということだ。私はマーマレードにして皮まで美味しくいただいた。また一緒に、甘夏づくりの説明などが書かれた

ものが入っていて、生産者の皆さんの思いが伝わって温かい気持ちになった。

この時期にはもう甘夏みかんはだめかもしれませんが、来年是非食べてみたいという方は下記までどうぞ。

(富重 慶子)

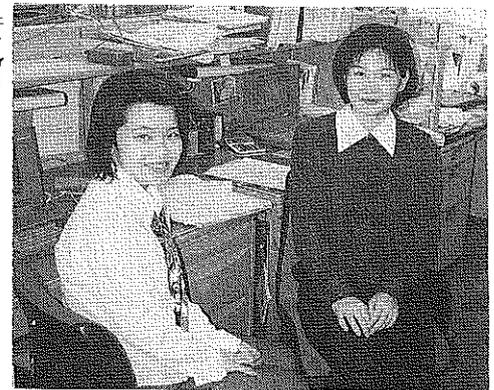
※「生産者きばる」(事務局 ガイアみなまた)

〒867 熊本県水俣市袋字陣原1-39

TEL.096-62-0039 FAX.096-62-0814

新 人 紹 介

左：^{さわ}澤谷
右：^{なかつ}七搦



☞ 『ホッ!』とする話

中学校を卒業してからの10年間、私の環境にはかなりの変化がありました。“ど”が付くほどの田舎である、島根県の隠岐の島という、知る人ぞ知る所でのびのびと育った私は、高校進学のため県内の大都会“松江市”で予備校までの4年間を過ごし、それから熊本、大阪と気楽な学生生活を送り、現在、福岡市民として、ここでパソコンに向かってます。

住まいを移る度に空の変化に驚かされてきました。透き通った青い空と、満点の星の下に見える漁船の灯が隠岐では当たり前のことと思っていたのに、徐々に、空の色が暗く、星が遠くに見えることになれ、北極星しか見えない大阪の空に、オリオン座が見えることに感激するようになっていました。そんな私にもう一つ感動を与えてくれ、『ほっ!』とさせてくれたのが、『空の名前』(高橋健司著)という一冊の写真集です。この本をめくると、「雲や雨には季節感のあるこんなに沢山の名前があるんだ」と感じます。何かに疲れたときにお薦めの一冊です。

(澤谷 真紀子)

■ 現実を見つめて

よく笑い、よく泣いて、よく怒った4年間の大学生生活は本当にあっという間に終わり、まだまだ未熟な私も無事、社会人一年生となることができました。

私の過ごした大学生活は毎日が遊びで、真剣に学業に励んだという輝かしい記憶はあまりありません。しかし、その中でも卒業時に取り組んだ「中山間地の農村景観の構成要素の継承に関する研究」では、とても大切なことを学びました。

卒業研究では、実際に熊本県内の中山間地の農村集落を3つ選定し、ヒヤリングと図面作成による調査を行いました。調査集落の中でも八代郡東陽村黒淵集落と鹿本郡菊鹿町番所集落は対象的な集落でした。

黒淵集落では現在でも棚田の石積みを当たり前に行っており、美しい景観を築いています。そこには意図的な景観に対する配慮はなく、結果として美しい景観を保全してきたのです。一方番所集落では、集落の花植えや清掃、コンクリートブロックを避けた石積みによる田畑の修繕工事を意図的に行うことで景観が保全されてきました。

この2集落の決定的な違いは黒淵集落は何かしら問題を抱えながらも今後も現在の景観を存続していくと思われませんが、番所集落は存続の危機に瀕しているということです。

本来農村景観は意図されて作られたものではなく、そこに住む人の農的営み、くらしから二次的に形成されたものです。つまり農村景観は農村の表情なのです。したがって景観を保全するために外面の美しさに捕らわれはじめた時点でその集落の内部は崩壊の危機に直面しており、景観保全は困難になっているのです。これは調査結果から明らかでした。しかし番所集落は崩壊するだろうなどと結論をだせば、何のために私がこの研究を行ったのか、また私のしたことは全部無駄になるような気がしてこれを素直に受け入れることができませんでした。

社会人になって、これからもこういった経験を幾度となく繰り返すことと思いますが、自分を納得させるための嘘や偽りはやめてしっかりと現実を見つめていきたいと思います。 (七瀬 かおり)



「街道を行く 40
台湾紀行」

司馬遼太郎著
朝日新聞社刊
¥1,700

この紀行の歩みは台北から始まっている。もちろん司馬遼太郎のことであるから、台湾の歴史や人々のエピソード、それに「文明とは何か」までを連ねて読ませていくので、具体的な「歩み」についてふれはじめるのは、もう47頁になってからである。その第一歩を歩く様子のことが気になった。

第一日の夜、商店街の歩道を歩いたが、その歩道が高くなったり低くなったりして極めて歩きにくくなっているが、同行の人がその都度注意してくれてありがたかったと述べて、次のような「公と私」についての話が出てくる。

「いうまでもなく、歩道は、公共のものである。が、台北では商店ごとの私が優っている。自店の都合で店頭

の歩道を盛り上げたり、そのままであったりする。

『戦前の台北ではありえないことでした』と、ある老台北が、日本時代のことをほめて(?)くれた。『蒋介石氏がきてから大陸の万人身勝手という風をもちこんだんです』と続いている。ここまで読んだとき、「じゃあ、日本はどうなんだ」と私は思った。日本はクルマ社会であるために、自動車が入りやすいように歩道が切り下げている。「私が優っている」のではなく「車が優っている」のが日本の現状である。せまい歩道の場合だと、数メートルごとに山あり谷ありで、車椅子ではとても通れない。

私には以前から考えているアイデアがある。歩道を切り下げるのではなく、車道側を「盛りあげたり、そのままにしたり」すればいいのではないかという考えである。ガソリンという重要な資源を使う側は、少々乗り心地が悪くても我慢すべきであり、率先して歩行者や車椅子などの便宜をはかることに異存のある人は少ないのではないか。まして歩道際は歩行者への配慮からもスピードをゆるめる必要があろうし、ゆっくり走れば乗り心地も悪くならない。この文章を読んだときから、この話を司馬遼太郎にしてみたかった。

話を本書にもどすと、ここに出てくる老台北氏が、なかば狂言まわしのような役回りで、この紀行文が進んでいく。このラオタイペイの紹介が出てくるのは、このあと100頁ぐらい進んだところであるが、それまでの間に「どうもあの人ではないのかな」と思いながら読み進んでいった。

今調べてみると1990年の6月に、新竹市科学園区(サイエンスパーク)へ行ったとき訪れたコンピュータソフト開発会社の社長さんで、その他にも十以上もの会社の責任者である。その後京都でもお会いしたことがあり、この台湾紀行を読んでいると、自分もこの道を回って見なければ悪いような気になっていった。

話を図書紹介にもどすと、この「街道を行く」は、司馬遼太郎が「日本を語る」旅である。海外に出た場合も、その場所を通して日本を語っており、極めて身近に現地を感じることができる。風景あり、歴史あり、人々の暮らしあり、古今の人たちとのつきあいがある。それが台湾一周の形で出てくる。

これを読まれた方は、必ず、自分も一周してみようと思うことになるにちがいない。

司馬遼太郎の私にとって、あまりにも呆気ない他界は残念至極であった。近年の日本人は、社会の趨勢は「常に右肩上がりのグラフ」だと思っている。しかし還暦ひとつ分(60年)遡ると、奈落へ逆落しするような勢いで右肩下がりを続けていた10年があり、その前の10年はその逆落しを準備するようなジメジメとした時期であったのだろう。またその前はどうかだったのか。

司馬遼太郎には、今後の10年間は、今までの60年のグラフのうちの、どの時期を適用して心構えをしておけばいいのか、あるいはその前に、日本のグラフがどうだったのか、今後の回り合わせも含めて、もっと示唆を残しておいて欲しかった。「そりゃ自分でやりなさいよ」ということかもしれない。今までの十分、「司馬遼太郎ありがとう」といわねばならないとは思っているのだが。

(糸乗 貞喜)

●高齢者はなぜふるさとを離れたのか(表紙解説)

表紙のテーマで、NIRA(総合研究開発機構)の助成を受けて調査を行った。その中の特徴的な部分をとりあげて図表としたのが、表紙及びこの表である。

現在の高齢転入・転出問題は、特に地方の高齢後期の女性問題である。ここに示したのは鹿児島県だ

けだが、全国の地方県は高齢女性比率が高くなっている。東京は若い人を地方から集めているので、高齢比率が低い。いずれ20年後ぐらいには同じ運命が待っている。つまり、高齢問題が大都市問題となる日が見えているのである。

単位：人、0/00

5年前の常住地からの移動状況
(鹿児島県)

| | | 5歳以上 総数 | 高齢者 | | | | | 80以上 ↓ 85歳 |
|----------|-----|---------------------|------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|------------------|
| | | | 65歳以上 計 | 60~64 ↓ 65~69 歳 | 65~69 ↓ 70~74 歳 | 70~74 ↓ 75~79 歳 | 75~79 ↓ 80~84 歳 | |
| 男女 合計 | 常住者 | 1,693,324 10,000 | 298,904 1,765 | 99,847 590 | 77,347 457 | 59,665 352 | 37,094 219 | 24,951 147 |
| | 現住所 | 1,231,833 7,275 | 269,874 1,594 | 92,350 545 | 71,152 420 | 53,811 318 | 32,086 189 | 20,475 121 |
| | 移動者 | 461,271 2,724 | 28,992 171 | 7,492 44 | 6,187 37 | 5,842 35 | 5,001 30 | 4,470 26 |
| 男 | 常住者 | 788,714 4,658 | 115,166 680 | 40,877 241 | 30,796 182 | 23,033 136 | 12,907 76 | 7,553 45 |
| | 現住所 | 564,962 3,336 | 105,797 625 | 37,947 224 | 28,640 169 | 21,158 125 | 11,528 68 | 6,524 39 |
| | 移動者 | 223,660 1,321 | 9,357 55 | 2,928 17 | 2,152 13 | 1,873 11 | 1,376 8 | 1,028 6 |
| 女 | 常住者 | 904,610 5,342 | 183,738 1,085 | 58,970 348 | 46,551 275 | 36,632 216 | 24,187 143 | 17,398 103 |
| | 現住所 | 666,871 3,938 | 164,077 969 | 54,403 321 | 42,512 251 | 32,653 193 | 20,558 121 | 13,951 82 |
| | 移動者 | 237,611 1,403 | 19,635 116 | 4,564 27 | 4,035 24 | 3,969 23 | 3,625 21 | 3,442 20 |

資料：「国勢調査」
※常住者には5年前の常住地「不詳」を含む
下段：常住者の総数を10000とした場合の比率

第4回よかネットパーティのご案内

美味しい特産品を食べながら、人と人との交流の輪づくりを目的として、毎年開催しております“よかネットパーティ”は、昨年まで当事務所7階会議室にて開催しておりましたが、今回は、スペースが限界に達してきたこともあり、20頁にご紹介しています「有智山荘」にて開催いたします。

「有智山荘」は、姪浜の博労など3戸の日本家屋を活用して建設されたもので、古材が巧みに生かされており、楽しい建物です。当日は、「有智山荘」建築主の高松氏から、民家移築のいきさつについてお話をさせていただく予定です。

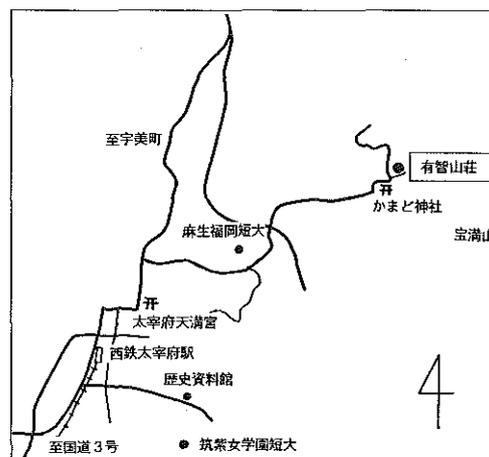
参加ご希望の方は、5月20日までにFAXもしくはTELでご連絡くださるようお願いいたします。

日 時：平成8年6月8日（土曜日）
12：00～15：00頃まで
この時間内に自由に来ていただければ結構です。

場 所：有智山荘
〒818-01 福岡県太宰府市大字内山字谷上

●紹介したい食べ物、飲物等がありましたらご連絡ください。こちらでとりよせます。

申 込 先：(株)九州地域計画研究所 担当：富重、尾崎
TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673



編集後記

■“よかネット”の模様替えをしました。3日坊主にならないように、何とか4号までは出そうねとって始めた“よかネット”ですが、多くの方の励ましのおかげで第20号まで続けることができました。その中で少し反省もしました。それは「サービスを通して皆様のお役に立つ」という視点が少し弱いのではないかとことです。その反省の中で考えたことは、①仕事の中で学んだことが誌面に現れていないのではないかと、②地域計画の業務に具体的に役立つ情報が少ないのではないかと、③下手なりに思いついた計画手法を批判していただくことが必要ではないかと、ということです。

■この反省の中から、そういうことを盛り込むには少し版型が小さいのではないかとことも考えてA4版にすることにしました。

■以上の考えを受けて入れて、そんな気分を込めて書いたりレポートは、「炭鉈住宅改良」、「地域データ散歩」、前号から始めている「一知半解」「高齢

者はなぜふるさとを離れたか」などです。できるだけこういう試みを続けたいと思っています。

■今後とも一層の御鞭撻（やわらかいむちで）をお願いいたします。(い)

よかネット NO.21 1996. 5

(編集・発行)

(株)九州地域計画研究所
〒810 福岡市中央区天神1-15-1 日之出ビル6F
TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

(ネットワーク会社)

(株)地域計画建築研究所
本社 京都事務所 TEL 075-221-5132
大阪事務所 TEL 06-942-5732
名古屋事務所 TEL 052-962-1224
東京事務所 TEL 03-3226-9130